
第15期

日本インド学生会議
活動報告書

2011

THE 15th JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE
OFFICIAL BULLETIN





上：横浜の日印協会との夕食会后

下：観光の浅草、浅草寺にて





上：開会式にて(駒場国際交流会館)

下：インド大使館にて



2011年度

第15期 日本インド学生会議

活動報告書

開催地：東京

目次

実行委員長挨拶	5
お世話になった方々からのお言葉	6
参加者名簿	16
特別コラム	18
第一部 日本インド学生会議とは	
基本理念	24
概要	25
沿革	26
第二部 活動報告	
年間活動報告	38
各局活動報告および反省	39
第三部 本会議報告	
実施要項	44
会議日録	46
分科会レポート	59
フィールドワーク報告	88
文化交流プログラム報告	93
修了書	95
写真集	96
第四部 個人語録	
実行委員個人エッセイ	106
インド学生からのメッセージ	120
第五部 おわりに	
謝辞	130
規約	131
編集後記	140

実行委員長挨拶

第15期日本インド学生会議実行委員長 住野 恭輔

9月20日の閉会式をもって、無事に第15回日本インド学生会議が幕を閉じました。毎週ミーティングを行い、準備をしてきましたが今となっては懐かしい思い出となっています。今回の会議を行う当たって震災の影響や資金難等、様々な問題はありましたが多くの方々からのご支援及び、ご理解があり無事に開催させていただくことができました。関係者の皆様、OBOGの皆様方に、心より熱く感謝申し上げます。

今回、日本開催、インド開催の経験者がおらず、震災の影響もあり前もあまり見えないまま、時だけが過ぎて行きました。どうすればより面白くできるか、どうすれば上手く運営できるのか、初めは何もわかりませんでした。OBOGの皆様からのアドバイスを受けて、本会議開催のためにやるべきことが見えてきました。また、今期はOBOGの皆様より多大なるご支援をいただきました。今期の活動は決して満足なものはいえませんが、多くのOBOGの皆様方が今会議に手助けをしてくださったこと、本会議へ深く関わってくださったことを大変嬉しく思うと同時に、来季以降より一層素晴らしい会議が行われることを祈るばかりです。

私たちが過ごした大事な時間、素敵な出逢い、そして、何にも代えがたい思い出を書かせていただきました。この報告書を通じて、私たちが本会議で感じたことを皆様にお伝えできることを大変嬉しく思います。

最後にあらためて関係者の皆様に、改めて心から感謝申し上げます。この度は誠にありがとうございました。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

在日インド国大使よりメッセージ

AMBASSADOR OF INDIA Alok Prasad



On the occasion of 15th Japan India Students Conference (JISC), I would like to convey my warm felicitations to the organizers and participants.

JISC has contributed significantly in promoting mutual understanding and friendship between Indian and Japanese Students. It is particularly gratifying that students from different backgrounds and cultures are participating in this Conference.

Student interactions are important as a means to build networks with other countries and to appreciate other cultural backgrounds. Both Indian and Japanese civilizations have historically been enriched by such interactions.

My best wishes for the success of the conference.

第15回印日学生会議成功に寄せて

日本語会話協会チーフパトロン ニガム和子

第15回目の印日学生会議が大成功のうちに終わりました。

今年は3月に東北大地震があり、最初日本での会議開催があやぶまれていましたが、準備された日本側の学生の皆様はさぞ大変だったかと存じます。

今期は日本側のメンバーは全員が入れ替わったこともありインド側の私達には想像もつかないご苦勞が沢山あったことでしょう。皆様お疲れ様でした。長浜先生、大変お世話になりました。それに引き換えコルカタ側のメンバー8名中3名は学生会議経験者でしたのでこちら側の準備は最初からスムーズにいった方だと思われます。それに8名中6名が日本語学習者なので日本に対してもっと深い関心があるというのが今年のグループの特徴でしょう。

インド大陸の中でコルカタは地理的に日本に近いというだけでなくベンガル民族はどちらかというウェットなタイプが多く、日本人と似ているところが多いと思われます。又、食文化もご飯と魚が中心という日本食に似たものがあります。

インターネットで多くの情報を一瞬のうちに入手できます。でも情報がありすぎてどれが必要かそうでないかを見極めるのが大変になってきています。そこで直接対話ができるこの印日学生会議の必要性が生まれてきます。そしてこの活動を通して得られたものを生涯の宝物とし大事に持ち続け又、この経験を仕事に生かされることを祈ります。

To 15th India Japan Student conference

ABK AOTS DOSOKAI Chairman M.R.Ranganathan

Our relation between JISC and ABK AOTS DOSOKAI TAMILNADU CENTER is very Vital to bring the student communities hearts between our two countries. The role played by JISC extremely important as more and more Japanese Companies move towards India. The JISC participants who understand the Indian mind and become the most effective future bridge.

This JISC seminar in Japan, where four students participated from Chennai , Tamilnadu was very impressive activity which was well appreciated by the Participants from India as very well organized and meaningful activity.

Our sincere thanks to Nagahama sensei, the brain behind the JISC and to the Japan India Association who introduce JISC to us. We eagerly look forward to the future JISC seminars in India and Japan.

We wish all the best and thank all the members of JISC.

JISC-15 ご挨拶

立命館アジア太平洋大学客員教授・ネール大学客員教師 **Ashok K. Chawla**

日本インド学生会議15期の日本開催は成功裏に終わり、学生から今回の会議は有意義な会議だったという報告を受けて、ホッとしながらとても嬉しく存じております。主催者の皆さん、おめでとうございます。発足期より後方から発起人の助言は絶えず続いています。実際の運営に関しては学生により企画され、学生の手で実施されるこの活動は20年、50年後、日印関係のシナリオの中で大事な位置づけを占める可能性のある有望な活動であります。そして、この会議の基本の一つ、草の根レベルの繋がりはとても強くて、一人一人の関係は自分の国にいながらも相手国の理解、物事の正しい普及につながります。

今、振り返ってみると、第4期の年、発起人の長浜先生から第1期の発足について、そしてその後の経緯について詳しく説明を聞き、学生主体の学生会議はとても素晴らしい実験だと評価し、デリー側では印日友好協会の代表としまして当協会の中に学生会議チャプターを設け、日本インド学生会議と覚書を結ぶことができたのは現在も良い事だったと感じております。第5期から第8期まで、その活動をインド側の学生に指導する機会が私に与えられていました。その間、毎年少しずつ改良することもできました。その後、デリー側主催者の中心メンバーが変わり、活動は数年間そのまま続きましたが、次第に主催者は日本語の先生方が中心となり安定期に入ったと思っておりました。私はこの数年間、デリーで開催された会議の学生参加者にお会いしていくつかのテーマについてお話ししたこともあります。

残念ながら第15期の日本開催には、デリーが欠席となりました。その理由としては、企画またはタイミングまたはアプローチの問題はインド側で反省すべきものですが、もっと根本的なところ、つまり組織の存在、運営、その活動の魅力、目標等々を今一度再検討する必要もあります。初期段階の日本側の参加者の何人かと日本またはインドで偶然会うことがあり、インドとの関係のある仕事に携わっているメンバーもいるようです。一方では、インド人学生メンバーの大部分は日本との関係のある仕事をやっているそうです。いずれにしても、インド人学生は親日、日本人学生は親インドとなり、お互いにお互いの国の立場、状況、物事が理解できる人が増えていることは本来の目的を十分に果たしています。

次は、どうやってこの活動での学生の参加を着実に増やせるのか、どうやって活動自体を持続可能なものにするのか、そして定期的に会議の目標の見直しまたはファインチューニングを行うのかの課題が残っていますが、エネルギー

バリバリの学生は必ず良い方向に向かせていくと存じています。このような課題に対しては、発起人とOBの役割に加えてOBによるさらなる組織強化が期待されます。

来年の日印友好 60 周年の年に向けて、日本インド学生会議のインド開催に対して学生会議がそれに見合った活動を考えていると思いますが、インド側で何か力になることができましたら幸いと思います。学生会議のさらなる発展と成長を祈ります。

MESSAGE OF CONGRATULTIONS

Visiting Lecturer, Keio University, RABINDER N. MALIK, Ph.D.

It gives me great pleasure to send this congratulatory message to mark the successful completion of the 15th Japan India Student Conference. As a long-term Indian resident of Japan, I would like to thank the Japanese students and the supporters for organizing such an excellent exchange program between students from Japan and India. I have no doubt that the exchanges that have taken place between Japanese and Indian students during the last fifteen years have made immense contributions towards promoting friendship and understanding among the peoples of our two countries.

I am a strong believer in people-to-people exchange, and when such interaction takes place among young people representing different cultures and traditions, the impact is long lasting as the youth of today are the leaders of tomorrow. Contacts with other cultures, especially at a young age, lead to tremendous personal growth of young people and foster the development of their intercultural communicative competence.

Based on my own long experience of living in different countries, I am sure that for the students from India who joined the conference in Tokyo it must have been a life-changing experience. They got the opportunity to learn more about Japan and its people. Participation in cultural activities gave them a chance to get acquainted with Japanese traditional arts and crafts, and home stays must have given them a deeper immersion in Japanese society and a better understanding of the Japanese manners and customs.

I would like to wish continued success to the Japan India Student Exchange Conference and will always be happy to assist in any possible way.

印学生会議15周年に寄せて

中央大学 保坂 俊司

日印学生会議の活動も15周年を迎えました。創設以来学生諸君を支え、ここまで本会議をこのような立派な団体に導かれた長浜先生はじめ諸先生、並びに歴代のメンバーの方々のご苦勞に頭が下がるばかりです。

今でこそインド經濟の好調振りが世界の注目を集め、日本でもインドへの関心が日増しに高まるという状況になりましたが、私が名ばかりの顧問を引き受けて、十年近くになります。その当時でさえ、日本社会のインドへの関心は薄く、本会議への評価も好事家的なレベルのものでした。そのために、私はこのようないわば日陰の日印関係に、若い学生が自腹を切っても、両国の将来のために交流会を持つという、その心意気に大いに感動したものです。しかし、その高い理想とは裏腹に、やはり日の当たらない交流活動の感は否めず、私は彼らを励ます意味で、学生による真の『草の根の交流』の意義を、常に強調させていただきました。

あれから十年近くになり、今や日印交流はいわば国家の最優先事項にもなりつつあるわけです。隔世の感ではありますが、日印学生会議のみなさんはますます意気軒昂ということでしょう。しかし、今後の学生諸君は、時代の趨勢に翻弄されることなく、真に日印両国の真心の交流、絆の交流を実現させる道を嘗ての先輩たちが築いた道を踏襲し、ますます盛んにしていただきたいと思います。というのも、真の日印の交流は、損得勘定を超えた無事の学生諸君の心の交流以外には、育てることが出来難いからです。その意味で、日印学生会議の活動は、今後一層重い意義を持つことになります。これからもますます多くの日印の学生が、この会議に参加し、日印の将来のために、堅固な礎を築く切っ掛けを作ってくださいたいと願っております。

しかし、私は「草の根交流」というような消極的な言葉は使わないことにいたします。今や日印学生会議は、まさに日印交流の象徴的存在に成長し、大きな樹木のような存在に成長しつつあるからです。

本会議の今後ますますの発展を祈念しつつ、本会議を支え続けてくださった多くの関係者の方々に感謝を申し上げつつ、更なる支援をお願い申し上げ、挨拶の言葉に代えさせていただきます。

学生会議での大切な出会い

日本インド学生会議 OBOG 会会長 5期OB 鈴木 佑輔

「インド人学生と会議するんだ！」と日本人学生は意気込んで本会議に臨む。インド人学生は、この質問にどう応えるのだろうか？インド人学生とどんな日々を過ごせるのだろうか？と。インド人学生もまた「日本人学生と会うんだ」と考えてることだろう。

日本インド学生会議は面白い。

日本インド学生会議を終えた日本人学生は皆、クリシュナが、アヌーが、ダガーが・・・と話し始める。なぜだろうか。

会ったインド人学生たちは、全員名前を持っていた。会ったインド人学生たちは、皆、固有の名前を持っていた。会ったインド人学生たちは、自分を名まえで呼んでくれた。インド人学生たちと会って話をしたが、クリシュナとアヌーでは意見が違っていた。インド人学生たちと会って話をしたが、アヌーと自分は意見が一緒だったが、ダガーとは違った。インド人学生たちと恋愛の話をしたら、ダガーとは好みが似ていたが、クリシュナとは違っていた。インド人学生たちと過ごしていたら、アヌーのことが好きになってしまった。

インド人学生たちと過ごしていたら、なんかいつもクリシュナと一緒にだった。そんな出来事が続き、名まえで呼ぶことになったのだ。

「インド人学生」では、話しきれなくなってしまったのだ。

日本インド学生会議が終わると、会議に参加した日本人学生、インド人学生は他の誰とも括ることのできない友人となる。

自由に一人格として意見を言え、一人格として認めあえる。一人格として、時間を共にし、感情を共有することが出来る。そういう瞬間を積み重ねて「インド」や「日本」という言葉を少なくしていける会議が日本インド学生会議だと思う。

さて、第15回日本インド学生会議はどうだったのだろうか、と楽しみにこの報告書をめくりたいと思います。

今年、第15期日本インド学生会議は、インド人学生を日本へ迎え、開催することが出来ました。そして、充実した日々を過ごし、無事に会議を終えることができたと住野実行委員長より報告を受けました。

多くの皆さまのお力添え、本当にありがとうございました。

今後とも日本インド学生会議をどうぞよろしく願いいたします。

人と心がつながりあう活動 J I S C

日本インド学生会議創設発起人

長浜 浩子

3月11日の東日本大震災により、今期の開催をインド開催に変更の必要があるのではないかと心配しておりましたが、インドから11人の学生を日本にお迎えすることができました。

15回目の日本インド学生会議本会議は、日本開催だけを数えるなら5回目となります。3期で初めてインドからの学生（当時コルカタのみ）6人を成田空港でお出迎えさせていただいた時のことは、今でもはっきりと覚えています。

3期コルカタの委員長を務めたスチェタは5期に参加した日本側メンバーと結婚し、今は日本で暮らしています。ジット（ビクラムジット）くんは日本へ来たことがきっかけでTOYOTAへの就職を実現させました。現在、彼はフォードへ移籍して大好きな自動車の仕事を続け、パパにもなりました。プジャは大学を卒業して間もなく結婚。私は結婚式出席のためだけの、4泊5日の短いインドへの旅をしました。式にはJISC3期メンバー2人も臨席。3期日本参加で撮った写真やお土産を宝物のように大切にしている様子を見て、胸に熱いものを感じました。現在オーストラリア在住、2児のママです。唄の上手なディーパはコルカタを離れ、結婚後はデリー在住。インド側・日本側JISC参加者と続いているご縁は、ここに書ききれないほどです。

15期の開会式・閉会式にはOBOGの懐かしいお顔に再会することができましたこと、本当にうれしく思いました。お子さんを連れて、また御主人がビデオを撮って下さるなど、次の18期にはもっとたくさんの懐かしいお顔や二世にお会いできることを楽しみにしたいと思うばかりです。

日本開催では、広く皆さまに協賛金のご協力いただくお願いをしております。今期も温かなご協力をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。プラサッド駐日インド大使閣下には夕食会や講演会のご招待をいただき、大使館の皆さまとの懇親の機会をいただきました。また、財団助成・企業訪問・ホームステイ・食事会を兼ねました懇親会・貴重な御助言など、各方面からのご協力を賜りましたことにも心よりお礼申し上げます。そして、末筆になりましたが、15期の活動をつないで下さった、ニガム先生、ランガナタン様、15期学生メンバーの皆さま、本当にありがとうございました。

来年は、日印国交樹立60周年の年です。今後も日本インド学生会議をよろしく願いいたします。

人と人が出会い心がつながり、インドと日本がつながる、世界につながる。いただいたご縁を大切にすることで、JISCの活動が正直で真っ直ぐに末永く続

くことを願っています。

第15期日本インド学生会議実行委員名簿

〈日本側〉

- ★住野 恭輔 (実行委員長、総務局長) 放送大学 教養学部 1年
- ★須藤 かおり (国内渉外局長) 日本女子大学 文学部 3年
- ★畑岡 弥生 (国際渉外局長) 明治大学 国際日本学部 2年
- ★池田 直輝 (学術局長) 中央大学 法学部 3年
- ★田中 龍之介 (広報局長) 東京大学 教養学部 2年
- ★三上 貴司 (副実行委員長、財務局長) 東京大学大学院 1年
- ★内野 隆子 (学術局、広報局) 日本大学 生物資源科学部 2年

〈インド側〉

Kolkata students

Pushpita Dhar (President and Communicator) Jadavpur University

Nibedita Sen (Vice president) Jadavpur University

Shrijeet Tripathy (Vice president of academic) Jadavpur University

Koyel Pal (Vice president of cultural) Calcutta University

Aritra Chowdhury (Academic) Jadavpur University

Suhashini Ganguly (Cultural) Jadavpur University

Pooja Das (Events) Cultural Lady Brabourne college

Parijat Chakrabarti (Vice president of Events) bit, techno ind Electronics and Communication engineering

Chennai Students

Prahal Saravana Kumar (President and Communicator) Vellore Institute of Technology University

Nivetha Mohanraj (Monetary) Bannari Amman Institute of Technology, Sathyamangalam

Praveen Kumar (Cultural) Chettinad College of engineering and technology

Vivek Narayan (Events) Sudharsan College

特別コラム「インド救援隊と同行した経験から見たインドと日本」

2011年3月11日、東日本大震災。その後世界中から義捐金・支援物資が寄せられ、また数多くの国から救援隊が送られたことはニュースでも度々報道されました。3月29日から4月6日まで、インドからも救援隊NDRF（National Disaster Response Force 国家災害対応部隊）が日本に来ていたことを知っている人は、この報告書を手にとっている人の中でも、多くはないのではないかと思います。具体的な活動内容となれば、尚更でしょう。

現在、外務省大臣官房国内広報課で勤務しており、インド救援隊に同行された笹井大嗣様に15期日本メンバーでお話をうかがいました。その貴重な内容をここに記します。

「インド救援隊と同行した経験から見たインドと日本」

◆東日本大震災では、なぜインドから救援隊が送られることになったのか

戦後から80年代末までの日印関係は全般に希薄で疎遠でした。アメリカ側の日本、ソ連側のインドという冷戦の対立構図から、両国首脳の間にはほぼ10年に一度のペースでした。青年海外協力隊も、2006年より再開をしていますが、1978年にインドを退去しています。

しかし、90年代以降日印関係は非常に親密化しました。1991年のインド通貨危機に対する日本からの緊急金融支援は、先進諸国の中で最も迅速な支援となりました。更に、90年代半ばから本格化したインド経済成長に日本の政財界も高い関心を抱いています。2000年8月の森総理のインド訪問を機に両国関係は一層親密化し、2007年8月の安倍総理のインド訪問以降、両国首脳の間には1年おきの相互訪問が定例化しました。

インドの大規模自然災害に対する日本からの義援金・物資による緊急支援も行われています。死者を1万人以上出した1999年のオリッサ州サイクロン、死者を2万人以上出した2001年のグジャラート州大地震などの際にも行われました。そして、東日本大震災に際し、インドから救援隊が送られることとなりました。救援隊派遣は「日印両国政府間合意」の事項でした。

◆インド救援隊

インド救援隊として、警察官の方が46名来ました。彼らは国家災害対応部隊という組織に所属していて、インド国内の自然災害の際には現地に急行し、生存者救出活動に従事しています。しかしこれまでの海外活動実績はなく、今回

が初めての海外派遣でした。

◆なぜ同行することになったのか

救援隊の日本滞在中は日本におけるインド政府代表機関である「在東京インド大使館」に管理責任がありますが、活動現場の女川町では、日本政府の代表機関である外務省から職員を派遣し地元関係機関、すなわち女川町、宮城県、宮城県警や被災者等との間に生じるさまざまな懸案を処理し、地元の皆さんとインド救援隊との間の相互協力がスムーズに運ぶよう努める必要がありました。また、日本や各国報道機関への取材対応も外務省の役割でした。

◆なぜ活動場所は女川町になったのか

牡鹿郡女川町は、町の大半が津波被害で全壊状態であるにもかかわらず、生存者捜索作業が皆無な上、自衛隊の主力が生存被災者サポート作業に移行した結果、作業開始見通しも立たないまま、町民人口の15%にあたる約1,500人が震災発生後2週間経っても依然行方不明のままでした。現地対策本部からも「一刻も早い救援作業を！」との要望が出されていました。近親に行方不明者を抱える住民は、近隣に設置された避難所で過ごしながらか、夜明けから日没まで自力で捜索活動を続けているという状況でした。

◆現地での生活

朝5:30には起床し、インド救援隊、通訳、外務省、宮城県警で打ち合わせをし、7:00には出発。キャンプに帰ってくるのは18:00頃。再び打ち合わせをして、眠るのは22:00頃という生活でした。

私たちは利府町のキャンプ地で、インド救援隊持参のテントで野営をしていました。トルコ救援隊も同じ場所でテント野営をしていました。食事はインド救援隊持参品の他、外務省より持参した緊急備蓄食料セットも適宜利用しました。燃料と飲料水は地元業者より購入しました。現地では断水状況が続いており、お風呂はもちろん洗顔することも叶いませんでした。女川町でも断水状況が続いていて、一部住民は、学校プールに溜まった薄緑色の水をバケツで直接汲み出して洗濯や食器洗いなどを行っていました。

4名のボランティアの通訳の方も付いてくださっていました。彼らが果たした役割は非常に大きかったです。インド隊、地元関係者からも期待され信頼を寄せられていました。外務省職員のように途中交替することなく、全日程にわたりインド隊一行に同行しました。移動バス車の中でヒンディー語の勉強をしたり、インド隊一行が日本を離れる際には自腹覚悟で成田に見送りに行くなど、意欲とサバイバル力の極めて高い方々でした。こうしたボランティアの方々の

存在は今回のような緊急事態では極めて貴重だと感じました。

また、インド隊の現地入り以降、宮城県警察本部の方数名がケア業務を一貫して担当してくださり、大変心強い存在でした。

インド隊の厚意により、私たちにはテント1基と石油ストーブ1台が配備されていました。しかしながら、途中でストーブが故障、深夜から明け方における厳寒の中でテントに留まることを余儀なくされたこともありました。毛布だけでは寒さをしのぐことができず寝袋で対応をしましたが、厳しい寒さで、睡眠に支障をきたすような状況でした。

◆インド救援隊の活動に対する地元の反応、日印両国政府の反応

インド隊が本格的に活動を開始した当初はその様子をやや遠巻きに観ていた人々も、インド隊が成果を挙げ始めると、その後方で見守る人々の数が次第に増えていきました。「誰も来てくれなかった我が町に来てくれただけでありがたい」。「捜索の仕方が大変手慣れていて、見ていて安心感が高かった」。「現金や身分証明書のみならず、写真アルバムまでも泥を丹念に払って渡してくれる姿勢に大変好感が持てた」。肉親の御遺体と対面出来た人やその様子を間近で観ていた住民の方からは、このような感謝が続々と表されるようになりました。

また、日印両国政府は、初の海外派遣はとりわけインドにとっては大きな決断であったが、今回のめざましい成果は日印両国の一層の関係緊密化に繋がる強力な契機となったと評価をしていました。

インド隊の活動を常時観察していた宮城県警からも「作業姿勢」「統制の取れたチームワーク」「遺体発見から搬出ルート作りまでの手慣れた作業」などに対する賞賛の声が発せられ、「発見したご遺体の大半が即座に身元判明したことはスムーズなご遺体引き渡しにも繋がり大変好ましかった」という、謝意表明すらありました。ボランティア通訳の方々からの助言を受け入れ、ゴミの分別に工夫がなされたことも、キャンプ地関係者より「よく整頓されていて素晴らしい」と激賞されました。

インド初めての救援隊の国外派遣でしたが、その沈着冷静な活動振りからは、これまで数多くの国内大規模災害に対処してきた経験とノウハウが十分に活かされているものと思われました。

インド救援隊の活動は新聞で広く報道されました。日本人一般のインドに対する認識の改善にも大きく貢献したと言えます。

◆インド救援隊同行の経験を振り返って

今回のインド救援隊への同行では、稀有な機会・経験を共有出来たことへの使命感・達成感がありました。

諸事情によりインド救援隊は重機を利用できませんでした。遺体を引き取る

立場の被災者や消防団等の地元関係者からは、「重機を使わない手作業による人海戦術は効率的とはいえないが、その代り、損傷のないご遺体引渡しが実現出来た」という声も聞かれました。ただ単に効率性のみを重視するだけでは解決しない事柄も存在するのだと知りました。

被災地の様子には言語表現を遙かに上回る衝撃があり、その光景は今も脳裏に付着しています。現場の「匂い」も鼻の奥深くに粘着しています。

インド救援隊隊員の優秀な作業振りと高い使命感、高潔な姿勢に深く感動するとともに、インドの優れた人材供給能力に改めて驚嘆しました。

また、被災地の人々とのやり取りを通じ、世界が絶賛する「日本人の冷静さと高い倫理感」を体感しました。しかし同時に、その冷静さ、大人しきは政府や企業の被災地救援の取組みにプラスとなっているのか、との疑問が起り、いろいろ悩み考えさせられました。

被災地から遠距離の地域での祭礼や花火大会の中止など、過度な自粛ムードは被災者からは歓迎される筈もなく、寧ろ復興の意欲を削ぐだけであり、厳しく批判されるべきです。

また、最近の風潮として、被災地で発生した大量の瓦礫を一部自治体が引き取り埋め立て処理することへの反対の声が挙がっているようですが、放射能汚染瓦礫とそうでないものとを混同して無知・無責任に反対しているものが目立つほか、ひどいものでは当該自治体居住者でもないのに「ソコに埋め立てられると家族で観光に行けないかも..」との呆れ果てた理由で反対する例も散見されます。除染対策が必須なのは無論ですが、そうした反対者には、「とにかくヤヤコシそうなモノを自分の町（や他の場所）に持ってこないで（いかにないで）欲しい..」との心境が窺え、皆でこの苦しみを共有しつつ難局を乗り切ろうとの自覚が欠如していると言わざるを得ません。こうした風潮に毅然とした態度を示しつつ皆で知恵を出し合い今後の困難を克服していくことが何よりも大切と考えます。

今回の原発事故により、**FUKUSHIMA** はヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ等と並ぶ世界共通語となり、今後長年に亘り語り継がれるでしょう。そのことを我々日本人は改めて自覚する必要があります。**FUKUSHIMA** にどのように取り組んでいくか、子や孫に、世界に、そして地球にツケを残さないようなエネルギーをいかにして開発推進していくのか。世界の眼が日本に注がれ続け、日本の国際的信用に直結する重大な試金石となる、という認識を我々はしっかりと持たなければなりません。

プロフィール

笹井大嗣（ささいだいじ）

在コルカタ日本国総領事館勤務（1999年2月-2002年11月。領事）

現在、外務省大臣官房国内広報課勤務（2009年11月-。課長補佐）

※こちらの記載記事につきましては、無断転載を禁じさせていただきます。

<第一部>

日本インド学生会議とは

日本インド学生会議 基本理念

「学生の学生による国際社会の将来のための会議」をモットーとする、私も日本インド学生会議の主たる目的は以下の通りであります。

- 1、 学生という立場を存分に生かした、既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれない自由かつ建設的な直接討議を通じ、世界の諸問題について新たな意見、解決策を導き出し、自ら実行するとともに、それを社会に報告・提案する。
- 2、 上記のような討議に限らず、日本とインド両国の学生が寝食をともにする本会議の全日程、またそこまでの準備期間を通じて、両国の学生が直接的な交流をすることにより、お互いの社会、文化、価値観、考え方などについて認識・理解をし、それらを社会に発信する。

現在、私たちが生活するこの地球上では、環境問題・内戦・経済摩擦・人権侵害・人種差別など様々な問題が起こっています。そんな中、次世代を担う我々学生は、このような問題に対して真剣に取り組まなくてはならないと考えます。そこで、当団体は「日本とインドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

まず初めに、学生という社会的・営利的・政治的なものから自由な立場の我々は、専門家やビジネスマン、政治家ではすることのできない、より直接的で草の根的な会議をすることが可能であります。当団体はその利点を存分に生かした、政治家や専門家の「縮小版」にならない会議を目指しています。その一方、いくら「草の根」とは言え、私どもと対話するのは、インドの学生という一部の上流階級の若者ではあります。しかし、彼らは確実にインド社会を変えていける存在として、非常に意味があるものだと考えています。

次に、何故インドなのでしょう？インドは複雑に民族・宗教が絡み合う、他に類を見ない多様性に富んだ国であり、同じアジアでも日本とは全く違った文化・社会を持っています。そのようなインドからは新たな道を探ること、新たな価値観を学ぶことができるのです。

また、現在、日本とインドはわずかな政治的・経済的關係を除き、文化的・精神的交流つまり人と人との交流は著しく乏しい状況にあり、お互いに誤解、偏見が至る所でみられます。私どもは、一年間の準備期間も含め「会議」というものを通して生身のインド人、インド文化を体験することができます。

そして以上のような成果で自分たちが成長するのはもちろんのこと、これらを社会に報告・提案することによって、国際社会に貢献することが当団体の最終目標であります。私どもは、社会からの助成・支援を受けて活動しているという自分たちの「公的性格」を認識し、社会還元への模索を続けていきます。

日本インド学生会議 概要

前ページの「基本理念」の実現に向かって、日本インド学生会議は、年間を通して活動しております。メンバーの参加資格は「学生」（大学、大学院、短期大学、専門学校）であり、活動は全て学生の手で企画・運営されています。

私どもの基本的な一年間の活動は、「準備活動（組織運営、勉強会、先遣隊、合宿など）」→「本会議開催」→「報告書編集・報告会開催」→「社会還元活動」という流れを軸にしています。そして、これらの活動の中心となるのは、通常活動として週一回開かれる定例ミーティングです。定例ミーティングでは、委員全体で審議すべき事項や、各担当局からの報告など会運営に必要な連絡などを行います。また、学術局を中心にインドに関する知識や分科会で必要とされる体系的な知識を身につけるための「勉強会」の開催も行っています。

その他、定期的に機関紙の発行やホームページの更新、専門家を招いての「講演会」や「新歓説明会」など、各種イベントの開催などを行い一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくよう努力しています。また、社会と接点を持って活動していくための、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。

また、他の国との学生会議団体や同じような志を持つ学生会議団体が集まった「学生会議連絡協議会（SCN）」にも積極的に参加し、お互いに切磋琢磨しております。

沿革（2011年11月現在）

1996年 8月 日本インド学生会議創設事務所発足
(石津達也、長浜浩子、後藤千枝)

第1期

1996年10月 第1期日本インド学生会議実行委員会発足
11月 臼田雅之氏（東海大学文学部教授）顧問就任
1997年 3月 カルカッタに第1回先遣隊派遣
8月 第1回本会議開催（於：カルカッタ）（8月2日～9月11日）
11月 第1期本会議報告会開催

第2期

1997年11月 第2期日本インド学生会議実行委員会発足
1998年 1月 (財) アジアカラブ主催 沖守広氏写真展参加
2月 機関紙第1号発行
3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣
4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
第1回総会開催（各種規約施行）
6月 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
機関紙第2号発行
7月 会議前合宿
8月 第2回本会議開催（於：カルカッタ）（8月5日～15日）
9月 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
10月 (財) アジアカラブ主催イベント
インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加
第2期本会議報告会開催

第3期

1998年11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足
機関紙第4号発行
12月 「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催
1999年 2月 「同上」討論会第2回開催
3月 機関紙第5号発行
4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
6月 カルカッタへ第3回先遣隊派遣

- (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 8月 福永正明氏 (拓殖大学) 顧問就任
 機関紙第 6 号発行
 9月 本会議直前合宿
 10月 **第 3 回本会議開催 (於：東京)** (10 月 2 日～13 日)
 機関紙第 8 号発行
 「ナマステ・インディア」参加
 12月 第 3 期本会議報告会開催
 第 3 回総会開催

第 4 期

- 1999 年 12 月 第 4 期日本インド学生会議実行委員会発足
 2000 年 1 月 「第 1 回学生会議連絡協議会フェア」参加
 JISC 公式ホームページ作成
 2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
 4月 機関紙第 9 号発行
 第 4 回総会開催
 「学生会議連絡協議会合同新歓」(SCN フェア 2000) 参加
 5月 (財) 日印協会主催「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」
 出席
 6月 バラーナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授を迎えての
 ヒアリング開催
 (財) 三菱銀行国際財団・(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 機関紙第 10 号発行
 8月 機関紙第 11 号発行
 本会議団結式・壮行会開催
第 4 回本会議開催 (於：カルカッタ) (8 月 7 日～26 日)
 9月 (財) 日印協会主催「森総理南西アジア訪問」講演会出席
 帰国報告会主催
 10月 「ナマステ・インディア」参加
 (財) インドビジネスセンター主催「日印 IT シンポジウム」参加
 (財) 日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席
 11月 国際基督教大学学園祭参加
 インド側発起人モハン・ゴーシュ氏を囲む会主催
 機関紙第 12 号発行

- 「学生会議連絡協議会合同報告会」参加
 12月 第4期本会議報告会開催
 駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催
 第5回総会開催

第5期

- 2001年 1月 第5期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催
 4月 SCN フェア 2001 参加
 (財) 国際教育財団より助成金給付
 5月 機関紙第13号発行
 日印議員連盟訪問
 外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問
 6月 山内利男氏を招いてのヒアリング勉強会開催
 日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催
 岐阜女子大学南アジア研究センター主催
 「日印ITシンポジウム」参加 協力
 7月 機関紙第14号発行
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
 直前合宿
 国際交流基金より助成金給付
 福永正明氏顧問退任
 8月 第5回本会議開催 (於：デリー・コルカタ) (8月2日～23日)
 9月 帰国報告会開催
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 10月 「ナマステ・インド」参加
 11月 亜細亜大学学園祭参加
 機関紙第15号発行
 12月 第5期本会議報告会開催
 第6回総会開催

第6期

- 2002年 1月 第6期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 第3期メンバーからのヒアリング
 3月 機関紙第16号発行
 4月 小野基先生(筑波大学教授)からのヒアリング開催

- SCN フェア 2002 参加
 在インド大使館後援名義受理
 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 5月 保坂俊司氏 (麗澤大学) 顧問就任
 (株) インドビジネスセンター後援名義受理
- 6月 勉強会集中合宿
- 7月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加
- (財) 日印協会後援受理
 (財) アジアクラブ後援名義受理
 インドセンター後援受理
 外務省後援名義受理
- 8月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣
- 9月 本会議直前合宿
 (財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 機関紙第 17 号発行
- 10月 (財) 国際交流基金より助成金給付
 (財) 東京都国際交流財団より助成金給付
 第 6 回本会議開催 (於：東京) (10 月 18 日～31 日)
- 12月 第 6 期本会議報告会開催

第 7 期

- 2002 年12月 第 7 期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2003 年 1月 第 7 期日本インド学生会議「本会議案」作成
- 3月 機関紙第 18 号発行
- 4月 実行委員交流合宿
 SCN フェア 2003 参加
- 5月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 6月 (財) 国際交流基金より助成金給付
 勉強会合宿 (分科会案作成)
 学生会議連絡協議会情報交換会参加
 (財) 日印協会より後援名義受理
 デリー・コルカタに先遣隊派遣
- 7月 機関紙第 19 号発行
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付

(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
(財) 日商岩井国際交流財団より助成金給付

8月 本会議直前合宿
関係者挨拶回り

第7回本会議開催 (於：デリー・コルカタ)

(8月9日～9月2

日)

10月 報告書作成
小学校訪問 (社会還元事業) 計4回
「ナマステ・インディア」参加

(財) 東京都国際交流財団より助成金給付

11月 第7期本会議報告会開催
「インドの魅力を発見する会」主催パネルディスカッションに
参加

12月 第7期本会議報告会開催

第8期

2003年12月 第8期日本インド学生会議実行委員会発足

2004年1月 第8期日本インド学生会議「本会議案」作成
学生会議総会開催

2月 ミーティング開始

3月 大使館主催のパーティーに参加

4月 機関紙第20号発行

OB・OGとの懇親会

第8期募集〆切 (4月末)

SCN フェア 2004(29日)参加

5月 メンバー交流合宿(9、10日)

(財) 吉田茂国際基金より助成金給付

(財) 国際教育財団より助成金給付

(財) 日商岩井億歳交流財団より助成金給付

7月 機関紙第21号発行

本会議前直前合宿(31日、8月1日)

8月 **第8回日本インド学生会議本会議開催** (於：デリー、コルカタ)
(8月11日～8月30日)

在コルカタ日本総領事館より後援名義受理

10月 第9期実行委員募集開始

- 「ナマステ・インディア」参加（16、17日）
- 小学校訪問（社会還元事業）
- 報告書作成（10月末発行）
- 11月 第8回日本インド学生会議報告会開催（28日）

第9期

- 2004年12月 第9期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2005年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始
- 4月 SCN フェア 2005(29日)に参加
- 5月 ミーティング開始
- OB・OGインタビュー実施
- 6月 合宿実施
- 7月 分科会トピック決定
- 8月 ミーティングを週2回に変更
- 本会議直前合宿（11・12日）
- 日本インド学生会議機関紙発行
- 第9回日本インド学生会議本会議開催**（28日～9月12日）
- 9月 第9回日本インド学生会議本会議終了（12日）
- コルカタ側メンバー帰国（13日）
- デリー側メンバー帰国（14日）
- 10月 報告書作成開始
- 日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2005」に協力（1・2日）
- 11月 報告書作成
- 12月 第9回日本インド学生会議本会議報告会（11日）

第10期

- 2005年11月 第10期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2006年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始 ミーティング開始
- 4月 SCN フェア 2006 参加
- 5月 合宿実施（26・27日）
- 6月 インド大使就任パーティー
- 先遣隊派遣（10日～19日）

- 合宿実施 (23・24日)
- 7月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問
- 8月 シン大使就任パーティー
第1回インド知識経済勉強会参加
渡印 (24日)
- 9月 **第10回日本インド学生会議本会議終了** (1日～19日)
日印文化交流祭「ナマステ・インドア 2006」に協力
(23・24日)
- 10月 インディアンデイ開催(28日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第10回日本インド学生会議本会議報告会 (26日)

第11期

- 2006年 12月 第11期日本インド学生会議発足
(以降毎週土曜ミーティング実施)
事業計画書・予算案作成、財団渉外・申請
- 2007年 1月 事業計画書・予算案作成、広報 (新メンバー募集)
アイセック主催インド勉強会参加 (7日)、財団渉外・申請
- 2月 広報 (新メンバー募集)
後援渉外・申請
- 4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 5月 財団申請
(財) 日商岩井国際交流財団(財)吉田茂国際基金より助成金給付
- 6月 **OBOG会主催 第1回 JISCDAY (30日)**
合宿実施 (30日・7月1日)
在インド日本大使館、在コルカタ総領事館、
在ムンバイ総領事館より後援名義受理
(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
- 7月 勉強会、模擬ディスカッション
先遣隊派遣プネー・デリー (29日～8月4日)
外務省より後援名義受理、日印交流年イベントとして認定
日印交流年実行委員より助成申請受理
(財) 国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理

- 8月 直前合宿実施（12日・13日）
第11期日本インド学生会議本会議（15日～9月7日）
- 9月 本会議終了（9月7日）、反省会
 日印文化交流祭「ナマステ・インドゥア2007」に協力
 （29日・30日）
- 10月 報告書作成、12期準備
- 11月 報告書完成
 第11期日印学生会議報告会実施
 （3日オリンピックセンターにて）

第12期

- 2007年11月 第12期日本インド学生会議実行委員会発足
 第11期メンバーからのヒアリング
 各種資料作成（事業計画書・予算書など）
 第1次京都先遣隊派遣
 IIT 同窓会講演会（於：慶應義塾大学）を補助
- 12月 国際開発研究者協会（SRID）学生部にて講演
 第1次勉強会合宿
 財団助成・後援の申請開始
- 2008年2月 日本インド学生会議 OBOG 総会
- 3月 第2次勉強会合宿
 （財）日印協会後援名義受理
- 4月 学生会議合同説明会（日印・日越・日韓・日中・日ケ）実施
 外務省後援名義受理
- 5月 インドセンター後援名義受理
 京都府後援名義受理
 第2次京都先遣隊派遣
 本会議直前合宿
 （財）日商岩井国際交流財団より助成金給付
本会議開催（於：東京・京都）（5月29日～6月11日）
- 6月 （財）日印協会より助成金給付
- 7月 （財）吉田茂国際基金より助成金交付
- 8月 報告書完成
 第12期本会議報告会実施

第13期

- 2008年10月 第13期日本インド学生会議実行委員会発足
第12期メンバーからのヒアリング
- 11月 各種資料作成（事業計画書・予算書など）
実行委員の募集
- 12月 学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
- 2009年1月 実行委員の募集
定例会
- 2月 日本インド学生会議 OBOG 総会
学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
取材
（メンターダイヤモンド学生記者クラブよりウェブ記事の取材）
- 3月 学生会議評議会の合同イベントの企画と実施
予算案の見直し
（財）日印協会後援名義受理
（財）双日国際交流財団助成金給付
（財）吉田茂国際基金助成金給付
- 4月 （財）国際交流基金助成金給付
学生会議評議会合同説明会実施
外務省後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
- 5月 日本インド学生会議 OBOG 会主催
「キャリアエクスチェンジ」参加
学生会議評議会交流会
学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
於：東京大学5月祭
- 6月 （財）三菱UFJ国際財団より助成金給付
学生会議合同勉強会（日中学生会議、日露学生会議と協働）
勉強会合宿
- 7月 合宿

- 8月 先遣隊派遣(8月5日～)
第13期日本インド学生会議本会議 (8月17日～9月7日)
- 9月 本会議終了
ナマステインディア 2009 出店
報告書作成
- 10月 報告書作成、決算報告
財団渉外、14期引き継ぎ準備
- 11月 第13期報告会実施
学生会議評議会合同報告会実施
第14期引き継ぎ

第14期

- 2009年12月 第14期日本インド学生会議実行委員会発足
第13期メンバーからのヒアリング
財団渉外
各種資料作成 (事業計画書・予算書など)
定例会
- 2010年1月 日本インド学生会議 OBOG 総会
メンバーリクルーティング
定例会
- 2月 財団渉外
SCN ミーティング
定例会
- 3月 SCN イベント
予算案見直し
(財)日印協会後援名義受理
(財)双日国際交流財団助成金給与
(財)吉田茂国際基金助成金給与
- 4月 (財)国際交流基金助成金給与
分科会 (勉強会) 合宿実施 (10日・11日)
SCN イベント (25日)
- 5月 SCN 交流会 (27日)
文化交流会 (日舞・ダンス練習) 合宿実施 (15日・16日)
入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 ソフトブリッジソリューションズ訪問 (25日)
(財) 三菱 UFJ 国際財団より助成金給付

- 7月 在インド日本国大使館 後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
分科会（勉強会）合宿実施（3日・4日）
直前合宿実施（31日・8月1日）
- 8月 先遣隊派遣（8月8日～）
第14期日本インド学生会議本会議（8月14日～9月4日）
- 9月 本会議終了（～9月4日）
「ナマステ・インディア2010」協力
報告書作成
- 10月 報告書完成 決算報告
財団渉外
第15期引き継ぎ準備
- 11月 第14期報告会実施（14日、オリンピックセンターにて）
- 12月 第15期引き継ぎ

<第二部>

活動報告

第 15 期日本インド学生会議年間活動報告

- 2010 年 12 月 財団渉外
各種資料作成（事業計画書・予算書など）
- 2011 年 1 月 メンバーリクルーティング
第 15 期日本インド学生会議実行委員会発足
第 14 期メンバーからヒアリング
- 2 月 財団渉外
- 3 月 東日本大震災により活動休止
- 4 月 予算案見直し
- 5 月 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6 月 (財) 三菱 UFJ 国際財団より助成金給付
合宿 オリンピックセンターにて（10・11日）
- 7 月 外務省後援名義 受理
株式会社インド・ビジネス・センター後援名義 受理
- 8 月 独立行政法人国際交流基金後援名義 受理
JICA 後援名義 受理
公益財団法人日印協会後援名義 受理
- 9 月 本会議直前合宿 オリンピックセンターにて（3日）
経済産業省後援名義 受理
在日インド大使館後援名義 受理
本会議 9 月 10～21 日
「ナマステ・インディア 2011」協力
報告書作成
- 10 月 報告書作成
財団渉外
第 16 期引き継ぎ準備
- 11 月 報告書完成 決算報告
第 15 期報告会実施（26日、東京大学にて）
- 12 月 第 16 期引き継ぎ

各局活動報告及び反省

総務局

局長：住野 恭輔

局長の一言：「縁の下の力持ち」

概要

総務局の仕事は、ミーティングの日時決め、議事録作成、スケジュール作成、他の局のヘルプなど本会議の準備を円滑に進めるため全体のタスクの進行状況の確認、仕事の分担をする局です。具体的には各局の進行状況の確認後、顧問・メンバー全体への説明を行う。局によって仕事の偏りがある場合はその調整及び、処理を行う。

反省

今期、総務局として十分な役割を果たすことができなかった。今期は極端な人員不足に悩まされ、全体の進行状況の確認及び、タスクの再分担という基本的なことが確実にできていなかったことが大きな課題として残った。全体の動きを確認しながら、先を考えてスケジュールを組まなければならないが器用な人には非常にやりがいのある局である

国内渉外局

局長：須藤 かおり

局員：三上 貴司

局長の一言：信頼が全て。慎重さと責任感が必須！！

概要

国内障渉外局は主に JISC と社会とを結ぶ窓口にあたる局だ。後援名義申請を行ったり、本会議の開会式やその他催し物にお呼びする方々へのご案内の作成やそのやり取りを行ったりすることなどが主な仕事である。JISC の代表として外部の方と直接関わる局であるだけに、その責任は大きい。また、他の局のフォローも必要に応じて行った。

反省

今回の本会議は直前まで詳細が確定しなかったことから、詳細のご案内など、連絡を早急に行えなかったことが大きな反省点である。次期以降は、是非とも早め早めに物事を確定していくことを推奨する。

財務局

局長：三上 貴司

局長の一言：責任重大。だからこそ、学ぶことも多い。

概要

一言でいうと、資金の確保と管理を行うことが仕事です。具体的には、本会議前は予算案を作成し、どれくらいの資金が必要かをみんなと共有します。また、助成金を申請したり、協賛金を集めたりします。その結果によって「できること・できないこと」が決まります（判断します）。本会議中は、お金の出入りを管理し、領収書とインド側参加費を集めます。本会議終了後は、集めた領収書を元に収支を計算し決算資料を作成します。

反省

本年度は、財団への助成申請が一部うまくいきませんでした。その結果、資金的にとっても苦しくなりました。OBOGからの協賛、つながりのある方、一般の方からの協賛、企業からの協賛、積立金により何とか開催することができました。来年度はもっと早くから、資金を確保するための活動を徹底して行う必要があると思います。また、8月の終わりまで協賛の為の活動が続いたため、本会議をより良いものにするための仕事が十分にできていませんでした。直前期は猫の手も借りたいほど忙しくなるので、できるだけ早く資金面での課題は解決しておきたいです。

国際渉外局

局長：畑岡 弥生

局長の一言：レスポンススピードが命。

概要

国際渉外局の主な仕事は、インド側の各先生、学生とイーメールやFAXなどを使って情報を共有する事である。両サイド側で話し合われた事、決定された事をすべて伝える為、本会議開催までは常に連絡を取り合っている状態であり、その為、定期的に連絡を取り合う事が大事である。

反省

国際渉外局長でありながら、自分の担当しているコルカタにばかり目がいったしまった。その為、チェンナイの学生確定が少し遅れてしまった。

広報局

局長：田中 龍之介

局員：内野 隆子

局長の一言：終わってから本格始動

概要

広報局の主な仕事は機関誌と報告書の発行及び広報活動にあります。機関誌は本会議開催前にメンバー紹介や準備状況を載せて関係者に向けて発行します。報告書では本会議終了後に本会議の様子や内容を報告します。広報活動はウェブ等を通して日々の活動や当団体について広報をします。

反省

地震の影響でメンバーがなかなか決まらないこともあり、機関誌の発行が遅めになってしまった。広報活動に関しては Twitter や Blog などがあんまり続かなかった点が反省点です。

学術局

局長：池田 直輝

局員：内野 隆子

局長の一言：相手の国を知り、自分たちの国を見直す、よいチャンス。

概要

学術局の仕事は、本会議を効率よく進めるため分科会のテーマを軸に日本メンバーの学術的事前学習を手助けする局である。具体的にはインドと日本の政治・経済・社会・文化等に関する知識の共有や、日本メンバーの分科会準備の手伝いなどを行う。今期では、日印の懸け橋となっている企業や今年の春 2011 年 3 月 11 日に大震災があったことをうけて、防災センターなどの訪問を企画した。また、勉強会やプレ分科会なども行った。

反省

企業などの選定自体は、目的意識を持ち明確に行えたと感じるが、そこから企業にアポイントメントを取るのが急になってしまったため、二か月前からアポイントメントできればよかった。また、今期は学術局員が二名とも直前に日本にいなかったため、周りのメンバーにも迷惑をかけてしまったと思う。

また、勉強会も時間の都合上、数回しか行えなかったが、分科会の準備に関しては時間をかなりとれたと思う。ただ、自分の発表分野だけに留まらず、他の分野の知識も増やして本会議に臨むべきだろう

＜第三部＞

本会議報告

第15期日本インド学生会議本会議 実施要綱

主催

第15期日本インド学生会議実行委員会

開催時期

2011年9月10日～21日

開催地

東京(日本)

助成

公益財団法人 双日国際交流財団



公益財団法人 双日国際交流財団

企業協賛

エア・インディア

株式会社 モナ



後援

外務省

在日インド大使館

経済産業省

公益財団法人 日印協会

独立行政法人 国際交流基金

JICA

株式会社インド・ビジネス・センター

個人協賛

吉野宏様

日印協会 有志

カジイ エイジ様

長谷川時夫様

櫻井秀武様
アツミ ヒロユキ様
三田村尚様
滝澤由加里様
ヒオ チヒロ様
鈴木祐輔様
鈴木美穂様
菱沼智子様
イトウ ヒロキ様
小川名穂子様
松岡環様
染谷葵様
サノ イチヤ様
渡邊美津代様
ウスダ マサユキ様
橋本楨矩様
大野馨様
ハヤシ マナミ様
三神尊志様
オクダ ユキエ様
トリモト シンジ様
川口匠美（旧姓吉野）様
栗原千咲（旧姓石田）様
フジイ チエミ様
ワタモト ユイコ様
オザキ マリコ様
鈴木千歳様

第15回日本インド学生会議日程

日程	場所	午前	午後	宿泊
9月10日(土)	東京	出迎え準備	インドメンバー出迎え	NYC(※)
11日(日)	東京	開会式準備	開会式 文化交流会 レセプションパーティ	NYC
12日(月)	東京	分科会①	株式会社IHI訪問	NYC
13日(火)	東京	分科会②	北区防災センター訪問	NYC
14日(水)	東京	観光	観光 在日インド大使館表敬訪問	NYC
15日(木)	東京 神奈川	分科会③	分科会③ 横浜インドセンター訪問	NYC
16日(金)	東京	観光		NYC
17日(土)	東京	文化体験	文化体験 ホームステイ	ホーム ステイ
18日(日)	東京	オープンセミナー準備	オープンセミナー	NYC
19日(月)	東京	閉会式準備	閉会式 文化交流会	NYC
20日(火)	東京	コルカタメンバー出発		NYC
21日(水)	東京	チェンナイメンバー出発		

※NYC: 国立オリンピック記念青少年総合センター

(The National Institution for Youth Education)

日程	場所	午前	午後	宿泊
Sat., Sep. 10	Tokyo	Arrangements for Receiving	Receive India Members	NYC(※)
Sun., Sep. 11	Tokyo	Arrangements for Opening Ceremony	Opening Ceremony Cultural Exchange Program Reception Party	NYC
Mon., Sep. 12	Tokyo	Table Discussion 1	Visit to IHI Corporation	NYC
Tue., Sep. 13	Tokyo	Table Discussion 2	Visit to Tokyo Kita-city Disaster Prevention Center	NYC
Wed., Sep. 14	Tokyo	Sightseeing	Sightseeing Courtesy Visit to Embassy of India, Tokyo	NYC
Thu., Sep. 15	Tokyo Kanagawa	Table Discussion 3	Table Discussion 4 Visit to Yokohama India Centre	NYC
Fri., Sep. 16	Tokyo	Sightseeing		NYC
Sat., Sep. 17	Tokyo	Cultural Experience	Cultural Experience Home Stay	Home Stay
Sun., Sep. 18	Tokyo	Arrangements for Open Lecture	Open Lecture	NYC
Mon., Sep. 19	Tokyo	Arrangements for Closing Ceremony	Closign Ceremony Cultural Exchange Program	NYC
Tue., Sep. 20	Tokyo	Departure of Kolkata Members		NYC
Wed., Sep. 21	Tokyo	Departure of Chennai Members		

※NYC : The National Institution for Youth Education

本会議 日録

9月10日～21日 Tokyo(Japan)

9月10日(土) 担当者：住野 恭輔

7:00	起床
11:00	コルカタ出迎え組が成田空港へ出発
15:45	コルカタメンバーと合流
17:00	コルカタ側、オリンピックセンターへ帰る
18:00	チェンナイ出迎え組が成田空港で出発
21:00	チェンナイメンバーと合流
23:00	全員オリンピックセンターに帰る
24:00	就寝



今日はいよいよ待ちに待ったインド側メンバー来日の日。朝、日本側メンバーはオリンピックセンターに集合し、コルカタ、チェンナイ担当に分かれると共にこの10日間に向けての様々な手続きを済ませた。まず、コルカタ担当の日本側メンバーが期待と緊張で胸を膨らませて成田空港に向かい、両手に「Welcome to Japan!!」の横断幕を抱え、彼らの到着を今か今かと待ち望んでいた。水を口に含んでみたり、トイレに行ってみたりするがどうも落ち着かなかった。そわそわしながら出口で待っているとコルカタメンバーが到着。お互いに挨拶は交わすも緊張とどうやって関わったらいいのかわからず会話が進まない。だが、「日本に来たのは初めて？なんで日本に興味を持ったの？」という言葉が皮切りにすぐに打ち解けていった。

噂にはインド人は連れて歩くのが大変と聞いていたが全くそんなことはなかった。インド側メンバーは皆、私たち日本側メンバーを気遣ってくれ、そのおかげで非常にスムーズに移動することができた。そのインド人の心遣いに相手を敬う文化を感じると同時にインド人と日本人の距離の近さを感じた。チェンナイメンバーを出迎える際にはターミナルを間違えるというトラブルもあったが無事合流でき、深夜にオリセンに到着した。

9月11日(日) 担当者：畑岡 弥生

7:00	起床
13:00	開会式
18:00	レセプションパーティー
21:30	オリンピックセンターに帰る
22:00	ミーティング
23:30	就寝



今日は開会式。日本側はスーツを着用し、朝からバタバタと準備に追われた。インド側は皆それぞれインドから持ってきたサリーや民族衣装を身にまとい、私は朝から少しうっとりしてしまった。開会式では、やはり両メンバーとも緊張していて、そわそわとしていた。来賓の方や先生方、OBOGの方々から素敵なお言葉を頂いて、これからの会議への期待がもっと膨らんだ。文化交流会では、インド側の美しい踊り、歌、日本のポップミュージックと、日本側の歌と習字が披露された。個人的に日本側の習字パフォーマンスは、「ザ・日本」をばっちり表現していてとても良かったと思う。

開会式が終わり一息ついた私たちは、レセプションパーティーの会場へと向かった。インド料理店のリトルインディアで行われたレセプションパーティーでは、インドカレーを囲みながら楽しい時間を過ごした。途中、インド側からのリクエストで私たちが「上を向いて歩こう」を歌ったり、インドメンバーがカラオケを始めたりなど、とても盛り上がった。まったく知らないヒンディー語の歌と一緒に歌おうと誘われて歌ったのだが、なんとか歌えた。みんな笑顔で嬉しかった。

こうして共に食事をしたり歌を歌ったりしていると、少し気恥ずかしかった気持ちもすぐに消え、皆がひとつになれた気がした。そして、この本会議は絶対に楽しいものになるという確信がもてた一日だった。

9月12日(月) 担当者：三上 貴司

7:30	起床
10:30	開会式練習
12:00	朝食
12:20	インドメンバーと会合
14:00	昼食
15:20	豊洲到着。IHI 本社付属の博物館 i-muse を見学後、会議室にて CSR 担当者やフランスからのインターン生と質疑応答。
17:25	IHI 出発
19:10	オリンピックセンターに到着
19:30	夕食(カフェテリアふじにて)
22:00	就寝



今日から、本会議のメインである分科会とフィールドワークが開始である。今日はどのグループもインドメンバーが発表したようだ。最初の発表をインド側に任せるとは、何とも日本人らしい。私のグループのテーマは「インドの15の発見・発明と10人の科学者」だった。インド学生の英語の流暢さに驚きつつも、負けてたまるかと意見を述べる。様々なインドの科学的発見・発明を聞いていく中で、日本とインドでの科学の位置づけなどにも話が及んだ。

午後は、日本を代表する重工業メーカーである IHI を訪問した。クレーンから発電用ボイラー、探査衛星はやぶさまで様々な製品を提供している。電車の不通により20分遅れての到着となったが、まず付属博物館の見学をした。社員の方が IHI の歴史と製品について解説してくださった。その後会議室へ移動して、社員の方2名とフランスから来たインターン学生1名との懇談をした。IHI のグローバル戦略、特にインド進出についてや新エネルギーへの取り組みなど、様々な話を聞くことができた。「IHI は変わらなければならない」という言葉がとても印象的だった。私たちは、変わらなければいけないだろうか？

9月13日(火) 担当者：須藤 かおり

7:30	起床
9:30	分科会開始(2人発表)
12:15	昼食
13:45	オリンピックセンター出発
14:45	北区防災センター到着
16:45	北区防災センター出発
22:30	就寝



この日は、北区防災センターへお邪魔した。今年の3月11日に東日本大震災での地震、津波等の自然災害を経験し、日頃から防災の意識をしっかりと持っておこうとの意識のもと、今回の北区防災センターを訪問することに至ったのだ。インドの学生も、震災発生時、遠いインドの国から日本の震災の報道を聞いていたので、地震や津波に関して大変興味を持っていた。インドは基本的に、日本のように頻繁に地震が起きる国ではないので、地震による被害の展示を見た時などは、とても驚いている様子だった。北区防災センターでは、地震体験、消火器体験、火災時の煙体験などのさまざまな体験をさせていただいた。中でも一番メンバーの関心が高かったのは、地震体験だったように思われる。普段経験することのない地震の揺れを実際に体験できたことが、インド人学生には新鮮だったようだ。揺れのグレードを3段階ほど設けていただいたのだが、震度6強の揺れには、日本メンバーも経験したことのない揺れの規模だったので、皆、恐怖を覚えている様子だった。北区防災センターを後にした後は、原宿へ街散策に向かうメンバーと、100円ショップへ向かうメンバーとに分かれて行動をした。インドにはない、日本ならではの100円ショップには、インド人学生の関心は非常に高く、中には、7000円以上もお菓子や扇子などの買い物に費やす学生がいたほどだった。

9月14日(水) 担当者:内野 隆子

7:30	起床
9:00	観光出発(4つのグループに分かれる)
15:00	オリンピックセンターに帰る
15:50	オリンピックセンター出発
16:50	在日インド大使館到着
22:45	オリンピックセンター到着
23:30	就寝



午後5時からインド大使館訪問までのあいだ、この日は都内観光を行うことにした。インドメンバーの中でも訪れたいところ、やりたいことに違いがあったので、目的別にグループに分かれて観光した。私は須藤と一緒に日本のサブカルチャー(漫画・アニメ等)に興味を持つインドメンバーの女子たちと池袋に向かった。私自身、池袋に不慣れだったので道に迷ってしまったが、彼女たちの寛大な心と広い視野に助けられ、なんとか目的地の「まんだらけ」に辿りついたのであった。昼ご飯を済ませてオリンピックセンターに戻り、他のグループと合流後、互いに訪れた場所の話をする暇もなく大使館へ行くための準備をした。

私にとって初めて訪れる大使館が大好きなインドの大使館であったというのは大きな喜びであった。大使館内の見学やキャンセル待ちだというヨガ教室の体験、外交官の方にお話を伺う機会もいただいた。

また、聖路加国際病院理事長、日野原先生によるインドの芸術家“ダゴール”についての講演会もお聴きすることができた。夕食はそのあと大使館内で立食パーティーに参加させていただき、大使館の方や講演会にいらした企業の方とお話をする貴重な機会となった。終わりには大使館からプレゼント(インドのカルチャーブック)をいただき、大切に胸に抱えて帰路についた。

8:50	起床
11:10	分科会開始(一人発表)
12:25	昼食
14:10	分科会開始(一人発表)
15:20	オープンセミナーに向けて分科会のまとめ作業
18:50	産業貿易センタービルにて日印協会などと夕食会
23:00	就寝



8時50分に起床をし、朝食を済ませたあとは、分科会を行った。分科会は本日が最終日で、英語にも慣れ積極的に参加をし、いままで以上に盛り上がったと思う。今回、私たちの班は世界、日本、インドの水問題とその解決方法、また、インドの車市場に参入している企業についてディスカッションを行った。私は大学で開発経済学を専攻しているため、インドの貧困問題について興味がありかなりの質問ができ、中身の濃い話し合いができたと感じる。インドの人たちは貧困をどうみているのか、それについて解決策はあるのか、また日本にはどういう問題があるのか、今までJISCの日本側メンバーで勉強会などを通して学んできたことを発展させ、机上だけではない、リアルのインドの状況を感じられたのは私たちにとって大きな収穫といえるだろう。そして、夜はメンバー全員で横浜のみなとみらいに位置する日印協会に訪問した。そこでは、草の根でさまざまな団体が日本とインドの友好の発展のために行動を起こしていることを知り、またインド側メンバーも質問を通して日本の深い理解につながったと感じる。みなとみらいエリアではインドメンバーが綺麗な夜景を背景に記念撮影をしていた姿が印象的であった。

9月16日(金) 担当者:内野 隆子

7:30	起床
9:00	各グループ観光へ
12:00	昼食
21:00	オリンピックセンター到着
22:30	就寝



14日の都内観光同様、この日もグループに分かれての自由観光となった。私は須藤、田中と共に女子メンバーを連れて秋葉原・渋谷・原宿・新宿の都会代表とも言える4箇所を訪れた。

朝ごはんをオリンピックセンター内のふじで済ませ、まず秋葉原に向かった。電子辞書が欲しいというメンバーもいたので、なんでも揃うであろう大型家電量販店ヨドバシカメラを目指した。1階から最上階まで、館内をくまなく見回った。一度“別行動をして時間になったら入口に集合しよう！”ということにしていたのだが、案の定、時間になってもスハシニ、ニベディタ、プシュピタの3人が現れず、ハラハラした面もあった。無事電子辞書も買え、メンバーも揃ったあと、お昼ご飯には彼女たちのリクエストでお好み焼きを食べた。

その後も希望を叶えるため、渋谷のスクランブル交差点を横断し、ハチ公前で写真を撮り、今度は原宿に向かいショッピングを楽しんだ。

彼女たちの御眼鏡にかなうものはあっただろうか。ただ、わたしは存分に買い物を楽しんでいる彼女らを見て、なんだか嬉しい気持ちになった。

陽が沈んだあとは新宿に移動し、ラーメンを食べ、東京都庁からの夜景を堪能した。しかし、一日中歩き回ったメンバーは夜景を見たい気持ちよりも早く帰って寝たいという気持ちの方が大きかったのかもしれない…(笑)

どのグループも東京を満喫し、多くのお土産話しや写真を見せてくれてとても楽しかった。

9月17日(土) 担当者:田中 龍之介

8:30	起床
10:30	浅草に向けてオリンピックセンター出発
12:00	浅草到着(14:00 まで仲見世自由散策)
14:40	昼食
17:00-	オリンピックセンターに戻り、ホームステイ先に各自出発
22:30	就寝



今日はお昼の内は浅草観光をし、夕方からはメインの一つであるインド側メンバーの日本家庭でのホームステイが行われた。

朝は前日がフリー観光で夜遅くまで都内をめぐることもあり、インド側メンバーの疲れを考慮して遅めの起床となり、観光もゆっくりと行うことにした。浅草は東京一の観光名所ということでインド側メンバーも楽しみにしていてスカイツリーや仲見世に大興奮し、各自が思い思いにお土産や軽食を購入していた。なかには父親向けに甚平を購入するインド側メンバーもいて、おみくじや賽銭など初めての体験にとっても喜んでいて、てんぷらが食べたいとのインド側からの希望から昼食は天丼を食べた。

その後、観光からオリセンに戻り、インド側メンバーはホームステイ先へと向かった。私は自宅にチェンナイメンバーのプラハルを招いた。スーパーで買い物したり、母の作る家庭料理を食べたり私の部屋に泊まったりとなかなか出来ない経験を持てたと思う。インド側メンバーの写真を見ると花火をしたり、たこ焼きを作ったり、新幹線に乗ったり、着物を着たりと各々が貴重な体験ができたようである。日本の伝統や生活を感じられる一日になった。

9月18日(日) 担当者:池田 直輝

10:30	ホームステイ先から全員オリンピックセンターに集合
12:00	オリンピックセンター出発
13:30	オープンセミナー開始
16:00	オープンセミナー終了 グループ毎に夕食へ
22:30	就寝



朝、8時半から参宮橋駅でインドメンバー側がホームステイ先から戻ってくるのをワクワクしながら待っていた。9時を過ぎると続々、みんなが到着をし、思い思いに自分のホームステイ先での素敵な体験を話してくれた。みんな、「私のホームステイ先が一番！」と口を揃えていっているのを聞いて、それぞれが素晴らしい経験をさせていただけたのだととても嬉しく思った。

その後の分科会の報告会も兼ねてのオープンセミナーでは、まず、各分科会の報告とそれに対する質疑応答をおこなった。次に、インド側メンバーから日本の印象を答えてもらったが、そこではさまざまな意見をきけた。自分たちが、観光で訪れた先で出会った面白いものや、日本人の素敵など、私たちが普段、気づかないふとしたことも彼らはよくみているなど実感した。また、その後にはご来場していただいた方との交流会も盛り上がりを見せたと思う。オープンセミナーを終え、観光のグループ毎に自由に夕食へ行き、東京の夜を満喫し、オリンピックセンターに帰ってきたのは遅くなってしまった。

9月19日(月) 担当者：住野 恭輔

7:00	起床
11:00	オリンピックセンター出発
12:00	駒場国際交流会館到着
13:00	閉会式開始
16:00	閉会式終了
20:00	オリンピックセンターに帰る
23:00	就寝



今日は長いようであつという間だった本会議を締めくくる閉会式。コルカタ、チェンナイ、日本側とそれぞれ自分たちの出し物の練習の成果を出そうと皆意気込んでいたがその傍ら、どこか寂しげな表情を見せていた。

閉会式も開会式と同じく、駒場の国際交流会館で行われた。日本側メンバーの開会の言葉と共に閉会式が始まる。会場を見渡すとそこには **OBOG** の先輩方がいた。日本側だけでなく、インド側の **OBOG** まで来ていただき、みんなとの別れが近づいていることも相まって、日本インド学生会議の絆の深さに少し感慨深くなった。日本側、コルカタ、チェンナイの各プレジデントによるスピーチが終わると日本側メンバーによるソーラン節の発表。練習不足に皆緊張していたが本番は成功。インド側メンバーにも喜んでもらえてなにより。その後、コルカタメンバーによる歌の発表。みんなで日本語の歌を準備して歌ってくれた。そして、チェンナイの発表。チェンナイは自分たちの伝統歌を歌ってくれた。それぞれの思い入れの深さに胸が熱くなった。最後には日印両メンバーで「**We are the world**」を舞台のうえで歌おうということになり、全員で歌い、感動的に閉会式は終了した。長浜先生からはインドメンバーに漢字の色紙のプレゼントという粋な心遣いがあり、インド側もとても喜んでいた。

閉会式が終わると夕食。それぞれグループに分かれ最後の大事な時間を過ごした。

9月20日(火) 担当者：畑岡 弥生

5:00	起床
10:00	成田空港到着
16:00	オリンピックセンターに帰る
21:00	ミーティング
23:00	就寝



今日はコルカタメンバーとお別れの日。早朝から最後の出発準備をしているインドメンバーだったが、まだ皆「お別れ」の実感がなかった。いつもと同じような朝を過ごし、大きなスーツケースを持ってオリセンを後にした。電車に乗っている時、次に乗る予定であった電車の遅延情報が届いた為、出発が早いインドメンバー4人を連れてすぐにタクシーに乗り換えた。タクシーの中では、時間通りに着くか本当に心配で、はやく着いてくれ、と祈るばかりであった。

無事、予定時間よりも早く成田空港に着くことが出来た。電車組とも合流し、空港に着いた途端、「無事着いて本当に良かった」という気持ちと「ここでお別れ」という気持ちが重なり合った。無事に着いた事が嬉しいのに、インドへ帰って欲しくない、そんな思いが自分の中でぶつかりあった。そしてインドメンバーの顔を見ると、どうしても涙を抑える事が出来なかった。どれだけ泣いたか分からないが、きっと私が一番泣いていただろう。インドメンバーはそんな時でさえも「私はあなたの笑顔が見たいのよ」と言ってくれて、最後までなんて暖かい、優しい人たちなのだろうと思った。「絶対ここに帰ってくる、だからこれは最後じゃないよ。また絶対会えるじゃない。遠く離れていても私たちは家族だよ。」こんな言葉を交わしあった。

みなそれぞれ握手を交わし、抱き合い、あっという間に搭乗の時間はやってきた。「絶対、また会おう！」と言いながら、彼らは日本を後にした。彼らも私達も別れに対する寂しさはあったが、それよりもこの本会議で出会えて良かった、という気持ちが大きく、最後には笑顔でお別れできたのが本当に良かった。

9月21日(水) 担当者：須藤 かおり

7:30	起床
11:00	オリンピックセンター出発
13:30	成田空港到着(チェックインまで空港内散策)
15:55	チェンナイメンバー出国
17:00	就寝



本日は、チェンナイメンバーの帰国日。朝からあいにくの大雨。台風が直撃とのこと。そんな悪天候の中、10日間日本で過ごすための荷物を入れた大きなスーツケースを運ぶのは容易なものではなかった。前日にコルカタメンバーとお別れしたばかりで、寂しさが残る朝であったが、チェンナイメンバーも帰国するとなると、いよいよ本会議もこれで終了なのかという何とも言えない寂しさがひしひしと感じられた。

本会議10日間の疲れもあってか、成田空港までの道のりでは、どのメンバーもうたた寝などをしていた。悪天候ながらも、特に交通機関の乱れに巻き込まれることもなく無事に空港に到着。チェックインの時間まで余裕があったので、空港内を散策したり、最後の別れを押しみながら写真撮影などをしたりした。そしてついにお別れの時が。台風の影響でかなりの便数が欠航のなか、チェンナイメンバーが乗る便は予定通りの運航であった。最後の最後、ゲートでお別れをする時は、本当にもうお別れなのなのだという悲しみがこみ上げてきて、涙を浮かべるメンバー続出。そして、チェンナイメンバーの姿が見えなくなるまで日本メンバーは見届けた。その後、日本メンバーは空港から直接それぞれの自宅へと帰宅の途についた。

分科会レポート

MEMBER

TECHNOLOGY	住野 恭輔 三上 貴司
BUSSINESS	池田 直輝 田中 龍之介
CULTURE	須藤 かおり 畑岡 弥生
SOCIETY	内野 隆子

日本側プレゼンテーション

●TECHNOLOGY

日本側参加者	三上 貴司 住野 恭輔
インド側参加者	Palijat CHakranabish Praveen Kumer

●テーマ：日本とインドの原子力発電

●概要：

■昨今の日本の状況

1966年、日本で最初に電力を作り始めた原子力発電所である東海原子力発電所が稼働開始。しかし、原発はあまり普及しなかった。そこで、1974年「電源三法」が公布される。政府は「地方の発展のためのお金」として、原子力発電所の設置を受け入れた地方自治体へ法に基づいて多額の交付金を支払った。以降、原子力発電所の数は急激に増える。その後、いくつかの重大な事故を経験する。そして2011年、東日本大震災に伴い、福岡第一原発事故が発生した。

2010年5月時点で、日本は17の発電所に54の稼働中の原子力発電プラントを持っている。総出力は48.847GWである。エネルギー自給率は2005年時点で約4%である。ただし、ウランを準国産資源とみなせば（一度輸入すれば、長い間使用可能であるため）、その比率は約19%まで上がる。

エネルギー利用の比率は、石油7.6%、石炭24.7%、自然ガス29.4%、原子力29.2%、水力8.1%（総電力供給ベース）（2009）となっている。

■昨今のインドの状況

2010年現在、インドには6か所の原子力発電所に20の稼働中の原子力発電プラントがあり、その発電容量は4.385GWeである。インド政府は20GWeの原子力発電容量を2020年までに獲得し、2032年までに63GWeにするとしている。福島第一原発事故の後、シン首相は原子力発電の安全性を早急に確認するよう指示を出したが、同時に、ラメシュ環境相はインドは原子力発電を推進するという方針を変えないと述べている。一方、2011年4月には反原発デモがジャイタプールで起こっている。

インドは慢性的な電力不足にあり、特に暑い夏の時期に輪番停電がインド全州で起こっている。電力供給のある郊外地域の44%が1日当たり12時間の停電を起こしているという。インドは世界で4番目のエネルギー消費国であり、その消費量は1997年から2007年の間に1.5倍になっている。更に、2030年には、2007年の消費量の2倍になっているだろうと予想されている。インドは石炭は

ほぼ総て自給しているが、一方、石油の自給率は30%である。

エネルギー利用比率は、石油 5%、石炭 69%、自然ガス 9%、原子力 3%、水力 13%（総電力供給ベース）（2007）となっている。

■代表的な事故

- (1) チェルノブイリ事故：1986年4月26日午前1時、電源を失った時のための実験を行った際に、爆発。事故当時はソ連により「作業員の運転ミス、規則違反」とされる。その後、1991年、ソ連崩壊の直前に出された報告書で原発自体の構造的欠陥が根本的な原因だと明言された。以降、欧州では原発の新設がほとんど行われなくなった。
- (2) もんじゅナトリウム漏洩事故：プルトニウムを消費して発電しながら、消費した以上のプルトニウムを生み出す「高速増殖炉」の「原型炉」であったもんじゅで、1995年12月8日、冷媒である液体ナトリウムが漏出する事故が発生。通報の遅れや事故現場のビデオ隠し、改ざんで問題になった。
- (3) JOC 臨界事故：1999年9月30日、東海村 JOC 転換試験場（八酸化三ウランを原発燃料となる二酸化ウランに転換していた）で臨海事故が発生。現場の作業員二名が死亡した。
- (4) フクシマ原発事故：地震直後に停止したが、津波により電源を失い、冷却機能を喪失する。結果、水素爆発、炉心溶融を起こし、放射性物質が大気に大量に放出された。「原子カルネサンス」が叫ばれる中での事故だった。

●総論：インドの学生も、原発事故が極めて甚大になり得ることは強く感じており、それでも「大量の電力を生み出すことのできる原発は、やはり私たちには必要。自分の家の近くにできるとしたら、私は受け入れる」と言っていた。インドが核不拡散条約を批准していないことを理由に長い間日本は原子力の技術をインドに提供していなかった点に話が及ぶと、核兵器はあまりに被害が大きいため、やむ得ない措置であったとの意見がでたり、核兵器は国家の力を示すのに必要なのだと思うが、将来的には無くすことができたら良いと思うという意見が出た。一方、日本のメンバーは原子力に対して強い意志を伴う意見を述べることはできていなかった。

日本は今「反原発」へと突き進んでいると言って差し支えないだろう。その決意がイノベーションを起こし、再生可能エネルギーが有力になることに期待をしたいと、筆者個人としては考えている。しかし、原発問題は技術の問題であり、資源の問題であり、外交の問題であり、日本が経験したように事故は世界に影響を与える。エネルギー問題は、一国の問題ではないということを、いま一度確認し、広い視野を持って熟考しなければならないだろう。

●TECHNOLOGY

日本側参加者	住野 恭輔 三上 貴司
インド側参加者	Palijat CHakranabish Praveen Kumer

●テーマ : The difference of Information Technology between Japan and India.

●概要 :

①インドと日本の IT 産業の現状

インドの IT 産業は 1980 年代にテキサス・インスツルメンツやモトローラ等の米国企業がバンガロールに現地のエンジニアを雇って事業所を配置したのが始まりである。その後、ヒューレット・パッカード、アメリカン・エクスプレス、シティバンク、ダン・アンド・ブラッドストリートといった企業が、1990 年代に IT センターを立ち上げた。2000 年問題が取りざたされた 1990 年代後半、IBM やアクセンチュア、EDS 等の大企業が、この問題対応にコンピュータのコードをチェックするエンジニア不足から作業を委託したのが、今日のインド IT 産業繁栄の礎となった。その後、SAP やピープルソフトからビジネス・アプリケーション・ソフトのメンテナンスを請け負うようになった。IT サービス業界でも、国際分業化は進んでいる。ソフトウェア開発もモジュラー化、標準化がすすみ、高付加価値でない部分は、海外委託（オフショア・アウトソーシング）という形で、コスト削減を図っている。このような状況を背景に、米国ソフトウェア企業のアジア戦略では、インドと中国が重要な位置を占める。特にインドは、英語圏であることや、シリコンバレーとの強い結びつきを土台に、ここ数年大きく発展した。米国のソフトウェア産業とインドの相互依存度は非常に高くなっている。

また、2009 年のインド国内 IT 市場規模は 1 兆 490 億ルピー（約 2 億円）となっている。2 兆円の市場規模の内訳はハード：42%、ソフト：11%、IT サービス等：38%、BPO:9%となっている。その一方、日本の IT 産業の市場規模は 2010 年度で 12 兆 35308 兆円と推定され、その内訳はハード 37.2%、ソフト 18.3%、IT サービス 44.5%となっており、2011 年中には中国に市場規模で逆転を許すと言われている。20 年前には「わが国の情報産業は 12 兆－13 兆円に達しているとの統計もある。このうちコンピューター産業は、年率 14－15%の成長が見込まれており、わが国産業全体をみても有望な産業だ」とまで言われていたが現在は低迷の一途を辿っていると言わざるを得ない。このインドと日本の差異の根源について議論した。

②インドと日本における高度 IT 人材の数の差

高度 IT 人材を数多く抱えるインドと高度 IT 人材の育成に頭を悩ませている日本。1980 年代から始まったインドの IT 業界は数多くの高度 IT 人材を輩出している。Hot Mail を作り出し、マイクロソフトに 4 億ドルで売ったサミュエル・バティアや、インフォシスを立ち上げたマルチ氏など世界に飛び出す高度 IT 人材が後を絶たない。

インドの ICT 産業は、1990 年代以降に目覚しく発展しており、既に全世界のソフトウェア・オフショア開発人材の 28%を提供する、世界最大の供給国となっている。全国にある約 350 の高等教育機関や約 1,700 の専門学校から、毎年約 50 万人の技術系人材や 230 万人の技術系以外の人材、30 万人以上の大学院研究生等が輩出されている。

一方、日本はソニーの盛田昭夫氏以降世界で大きく活躍している IT 人材はほとんどいない。英語の苦手な日本人にとって、オフショアリングはもちろん、海外に飛び出ていく IT 人材は教授陣を除くと、ほぼ皆無である。今後の予想されるインドと日本における高度 IT 人材のあるべき姿について議論した。

●総論

インドと日本の高度 IT 人材の輩出数の差異の原因はそれぞれの国におけるインセンティブの違いであることがわかった。インドでは人材育成戦略には力を入れている。インドでは IT 労働開発イニシアチブ、国家 IT 人材スキル登用制度、競争力評価制度といった国家人材戦略が存在している。IT 企業に必要なスキルを獲得させるために欧米企業も含めたフォカルティ・トレーニングの実施、特定大学と特定企業とのメンターシップ、産業界と学会によるフォーラムの開催など高度 IT 人材輩出への環境創りを徹底している。日本も遅れながら、情報処理推進機構などが高度 IT 人材の輩出へ向けて動いている。現在、大学入試センター試験を情報処理技術者試験は日本で最も受験者数の多い国家試験となっており、また筑波大学などいくつかの大学ではコンピューターサイエンス学部が現れ始めている。それにも関わらず以前、インドと比較して日本の IT 人材の比率が低いのは IT 職に対するインセンティブの違いであるようだ。インドではエンジニアのみが学部から直接就職することができ、またエンジニア職の給料は高い。そして、インドでは頭のいい学生は理系、そうでない学生は文系という価値観があるらしく、エンジニアになることが一つのステータスとなっている。その一方、日本でのエンジニア職の見方は 3K と言われるように、「キツイ、帰れない、厳しい」、それでもって給料も文系とそれほど遜色無いため、日本の学生にとってインセンティブが薄くなっているのだろう。以上のように、インドと日本の高度 IT 人材の輩出比率の差異はそれぞれの国におけるインセンティブの違いであると言えるだろう。

●BUSSINESS

日本側参加者	池田 直輝 田中 龍之介
インド側参加者	Shrijeet Tripathy Prahal Saravana Kumar Vivek Naraian

●テーマ：インドと日本の水事情・水ビジネスについて

●概要

ミレニアム開発目標が2000年に国連ミレニアムサミットで採択された。その中の、ゴール7のターゲット7.Cでは2015年までに、安全な飲料水及び衛生施設を継続的に利用できない人々の割合を半減すると規定されている。それは、まさに水が生命維持、社会生活、環境の保全に欠かすことのできない必須物資だからである。そのため、いま多くの日系企業などが発展途上国（特に新興国）の水の市場にビジネスとして参入を始めているが、現在、インドにはどのような水・衛生問題があるのか、また日本には問題がないのか、それら問題を解決するために、企業の参画以外にどのような解決方法があると考えられるかについて話し合った。

●ディスカッションポイント

- ① インドでの水や衛生分野での問題点はなにか
- ② 日本での問題点は何か
- ③ それらを解決するためになにをすべきか

<インドでの問題について>

- ・水の不公平な分配が起こっているということ。これは、政府予算や法律などが州政府によって異なるという一面と、地理的にもともと水の多い地域と少ない地域があるということがある。また、川の上流にある州がダムなどを建設し、争いになったこともある。
- ・特に貧困層の衛生意識の低さがある。
- ・水の供給よりも衛生設備（トイレ）が圧倒的に不足している。
- ・それらからもたらされる水因性疾病（下痢）

<日本での問題について>

- ・古くなった水道管があるのではないか

- ・東北の大震災をうけて、地震や自然災害への不安がある
- ・公共事業である水道事業には私企業が参入するのが難しい

<インドの問題解決のために>

- ・中央政府の力を強化し、それぞれの州へのモニタリングのシステムを強化する。(これにより、紛争などが起こらないようになる)
- ・インドは全世界の16%の人口を擁する一方、地球上の4%の水源しか持たず、さらに淡水化政策も推進されていないため、その分野で海外企業の参入を増やす。
- ・NGOや企業などが政府へアドボカシー活動を行い、政府の水衛生分野への予算を増やさせる。
- ・日本を含め海外の成功例を参考にする

<日本の問題解決のために>

- ・地震や自然災害に強いものにする
- ・古い水道管のリハビリを行う

●総論

世界にはまだまだ、多くの水衛生問題が残っており、それはインドでも、日本でも変わらない。インド政府は重要性を認識してはいるものの、なお水衛生分野のプライオリティーは低いということだ。それが引き起こされる要因として考えられるのは住民の意識が低く、重要性を認識するに至っていないということだろう。ただ、上水道を含め、安全な水の重要性は理解されているものの、トイレの必要性は認識されておらず、それゆえなかなか、自分たちにとって必要であるとの声が住民(貧困層)からあがってこないということがあるだろう。また、地域間格差(都市部と農村部)が本当に大きいとのことだ。

ただ、一般的にインド人の衛生意識は高いとの意見もあった。歯磨きは徹底され、うがいも何度も行われている。しかし、依然として問題は山積しており、それは日本でも変わらない。日本も、東北大震災を受けて、水道管の破裂や液状化などが大きく取り上げられた。

これら問題にいち早く取り組む必要があると実感し、またインド学生にしかわからない多くの意見が出たと思う。

●BUSSINESS

日本側参加者	田中 龍之介 池田 直輝
インド側参加者	Shrijeet Tripathy Prahallad Saravana Kumar Vivek Narayan

●テーマ：日本の自動車産業およびインドの自動車事情研究

●概要：

今回、私は日本及びインドの自動車について発表を行った。トヨタがインド専用車を作っていることやホンダもインド向けの低価格車導入を決めたことは最近の新聞紙面でも話題になっており、日本の主要産業である自動車産業について話すことはインドの学生にとっても日本を理解する一つの助けにもなると思ったし、インド自動車市場ではスズキが最大のシェアを持つこともあり、日本とインドを結びつけやすいと思ってこのテーマを選びました。

まず、日本の各メーカーについて説明した後に日本市場が少子高齢化や都市化、不況のために縮小していること、日本市場ではコンパクトカー及びエコカーが人気であること、日本の部品メーカーのすそ野が広いこと、3.11の東日本大震災の自動車産業への影響、日本のメーカーが世界の中で技術的に優位を持つハイブリッドや電気自動車の構造について映像や図を交えて説明を行った。うちの分科会のインド側メンバーは皆理系のため、ハイブリッドなどの環境技術に対して高い関心を示していた。次に世界市場における日本車のシェアの説明をアメリカ、東南アジア、中国について行った。アメリカでは韓国のヒュンダイが日本車のライバルと説明するとインドでもシェア2位ということもあり、日本メーカーとの比較する意見が出たり、東南アジアで日本車のシェアが90%近い理由として現地専用車があることについて説明すると驚きの声が聞かれた。次にインドの自動車市場や自動車産業について説明をした。インドは2050年にはアメリカとならぶGDPを有するようになるなど経済成長が見込め、人口も豊富な若年層を抱えることから自動車市場は大きな伸びが見込める。現在、インド市場ではスズキが4割のシェアを持つ一方でトヨタやスズキのシェアは3%にすぎない原因を分析し、原因としてスズキの販売店網が地方にも広がっている一方でトヨタなどは都市にしか販売店がないこと、スズキはすでにインド国内に工場を有し、部品の現地調達率をあげて関税の影響を受けにくいこと、ス

ズキが多くの上国向けの車を有す一方でトヨタなどは先進国向けの車をそのまま上国に持ち込んでいるため過剰装備で価格が高いことをあげた。特に最後の点については実際に車名と価格を挙げて説明したため、インド側からも多くの意見や感想が出た。最後にトヨタがインド市場向けに発表した「エティオス」がインド向けにエアコンの通風口の配置に工夫をこらしていることなど最近の日本のメーカーのインド戦略について説明を行った。



トヨタ「エティオス」



タタ「ナノ」

●総論

とにかく、自分が思っていたよりもインド側メンバーが自動車について知識を有していて日本とインドでのプリウスの値段を比較し、インドでは日本の2倍する理由についてハイブリッドカーがプリウスしかないためであるとか、関税のためであるなど盛んに意見が出された。インド側は免許を有していて日頃車にはよく親しんでいるようで“クルマ離れ”が叫ばれる日本の若者とは対照的でインドのモータリゼーションが進んでいることが実感された。インドには世界一安いクルマ「ナノ」を作ったタタがあり、そのことも大変話題になった。

●CULTURE

日本側参加者	畑岡 弥生 須藤 かおり
インド側参加者	Koyel Pal Suhasini Ganguly Pooja Das

●テーマ： 日本、インドにおけるメディアの在り方とその問題点

●概要：近年話題になっている日本の一般メディアに象徴される特徴や問題点、そしてインドとのそれを比較しながらプレゼンをした。

日本ではタイムリーなニュースが毎日必ず決まった形、時間にテレビに流れ、国民は常に最新のニュースをチェックできる。日本人は、テレビさえ持っていれば情報を自然に入手することが出来る。テレビにおける誤報はあまり見られないが、インターネットの普及とともに騒がれてきたのがインターネット問題であった。子どもから大人まで全人口の約 60 パーセントがインターネットを使用している今、ネットから生じる問題が多い。例えば小中学生のいじめ問題（インターネット書き込みによる間接的いじめ）や、殺人予告掲示板、誹謗中傷サイトなど、インターネットの自由性からこの様なものまで使用されており、インターネットが絡んだ犯罪も多くなっているのが現状である。

また、東日本大震災の時に顕著になったメディアコントロールについても言及した。誤報をそのまま受け止めてしまい、国民がパニックになったという説明をするとインド人は驚いていた。

インドでも、近年テレビやラジオの普及率がみるみるうちに伸びている。テレビを持っている家庭に集まり、観賞するというケースもあり、とにかくテレビはインド国民にとっても欠かせないものになっているという。インターネットも然り、だが、自前のパソコンを持っていない人々はインターネットカフェで使用するという。自前のパソコンを持っている人たちは、それを利用して海外のページやテレビ番組、アニメーションを見ることが出来ると言っていた。

もしもインドで東日本大震災のような災害が起こったらどうやって人々は情報を入手するのか、と聞くと、テレビには 2 ヶ月後でないとならば情報は入ってこないと言う。人づてやインターネットが有力だと言っていた。

インドではテレビが普及し始めていると言ったが、本当の意味でのテレビの役割は、まだ果たせていないのが現状だろうと思った。

●総論

日本はメディアが普及し、成長しすぎてしまった為に上記の様な問題点が生まれてきたのではないかと思う。インドではまだ日本よりメディアの発達が進歩していないが、確実にこの先伸びていくだろう。その時に、日本の様な道に行くのか、それとも国民の為となるような発信ツールに成り得るのか、それが重要だと思った。

また、テレビが普及され始めている今日でさえ、国民はテレビに頼りすぎず人伝いなどで情報を交換するという、インドらしさもうかがえた。なので、インドではやはりまだ、草の根的な情報交換がインド国民に合っているのではないかと思った。

メディアというものをきちんとした自分の知識と共に使っていく必要があると思った。

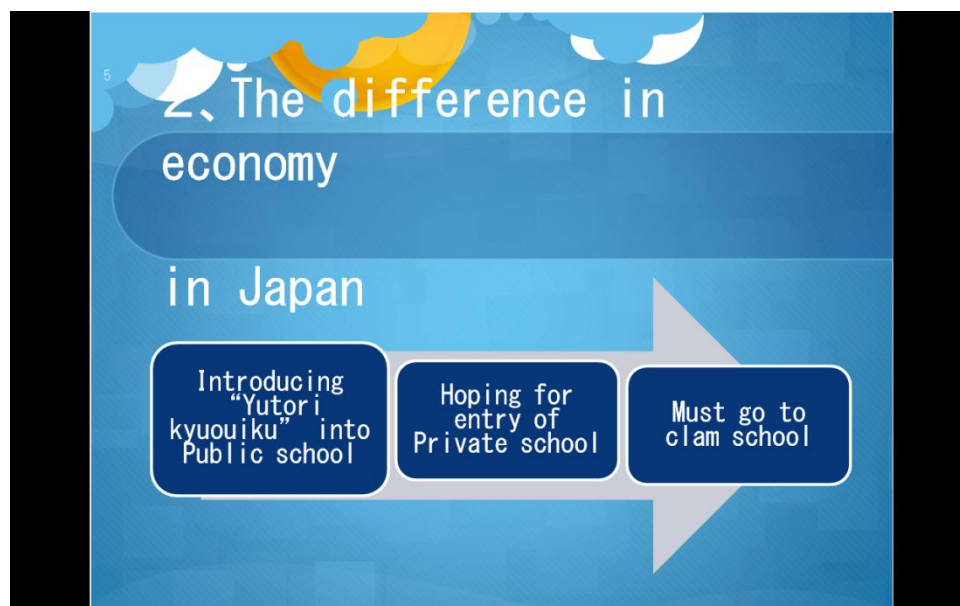


●CULTURE

日本側参加者	須藤 かおり 畑岡 弥生
インド側参加者	Koyel Pal Pooja Das Suhashini Ganguly

●テーマ：日本における教育制度とその問題点（重点：ゆとり教育について）

●概要：日本では、家庭の経済格差が教育レベルに影響している。これは、「ゆとり教育」から起因していると考えられる。ゆとり教育は2002年に公立の学校で導入され始めた。しかしより高水準の教育を受けたいと考えた多くの人々は私立の学校に通い始めることとなる。高水準の私立学校に入学するためにはその学校の難しい入学試験に合格しなければならない。合格するには、「塾」と呼ばれる補助的な学校に通わなくてはなかなか難しいものがある。しかし塾に通うためには高い通塾料が必要となるため、裕福な家庭の子は塾に通うことができるが、そうでない子は通うことができないという現象が起きてしまう。結果として、裕福な家庭の子供は高水準の教育を受けることができるが、そうでない家庭の子供は高水準の教育を受けることがなかなか難しいという事態が起きてしまった。



ディスカッションの中では、それでは、お金がなくてはいい教育を受けることができなという話になった。インドでは奨学金の制度が充実しているようで、本人が頑張ることによって奨学金がもらえ、進学がしやすい環境になっているのだそう。日本にも奨学金の制度は整っているが、審査が厳しかったりと、そこまで簡単に授与してもらえるものでもないため、もっと奨学金がもらいやすい環境を整えるべきなのではないかという意見が出た。

●総論

経済格差によって教育レベルに差が出るのは日本だけではなく、インドも同様なのだそう。というのも、インドにも **government school** と **private school** が存在しており、前者が日本でいう公立学校、後者が私立学校にあたり、後者の方がより充実した教育施設の中で高水準の教育を受けることができるのだそう。「ゆとり教育」という制度が存在したのが日本でこそあれ、教育水準と家計の状況が密接に関係し合っているのは、日本でもインドでも共通して言えることのようにだ。

また、学生がよりよい教育を受けられるようにするためにも、奨学金制度の柔軟性が日本にはもっと必要のように思われる。

教育は、その国の未来を築いていくための重要要素である。よって、その要の部分の方向性を間違ってはならないし、国はより力を入れて教育支援をしていくべきだ。

●SOCIETY

日本側参加者	内野 隆子
インド側参加者	Pushpita Dhar Nibedita Sen Aritra Chowdhury Nivetha Mohanraj

●日本側テーマ：ゴミ問題

●概要：日本における現在のゴミ問題を紹介し、ゴミ処理に関しての問題点・解決するにはどうすべきか、ということ話し合った。また、その上でインドのゴミの状況も教えてもらった。私自身インドに行ったことがあるので、その時に感じたことを伝え、疑問に思ったことを質問した。

インドメンバーは東京にやってくるまで、「日本は綺麗。清潔だ。」と何度か言ってくれたが、実際日本でも、ゴミのポイ捨てや分別が問題になっている。分別の制度は自治体によって定められているが、すべての国民がその決まりを守っているとは言い難い。駅のゴミ箱はペットボトルや家庭ごみの混ざった分別のされていないゴミで溢れている。これは今日の日本で特別なことではない。

このように人が多く集まる都市部でのゴミ消費とは別に、山間部での粗大ゴミの不法投棄もある、ということを紹介した。用意したスライドの写真を見て、日本でも家電製品や車が山に放置されていることに多少驚いていた。

また、ゴミの処理についても話し合いをした。日本ではゴミはほとんど埋め立て処理されている。埋め立てによって、先の東日本大震災でも問題になった、埋立地の液状化現象、埋立地の土地確保が難しくなっていること、ゴミから出る有毒素が土壌や海に与える影響の大きさなど、数々の問題が挙がってきている。

先進国と言え、まだまだ日本も人とその他の動植物が快適に暮らせる環境を作り上げられていないということがわかった。

私が一番驚いたのが、彼らが『ゴミ』というものに普段からあまり接していないということであった。ゴミを片付けるのは私たちの仕事ではない。と思っている人も多いのだそう。犬の散歩中に犬が排泄したら、日本ではその排泄物を飼い主が必ず拾って持ち帰る、というのがルール・マナーである。その

ことを彼らは信じられないらしく、「あなたが拾うの!？」とショックを受けていた。ヒन्दゥー教のカースト制度というのは今でこそ法律で無くなっているが、やはり人々の生活に根強く残っているのだ、ということを実感した。彼らは、自分たちで身の回りのゴミを処理するという事に多少抵抗があるように思えた。

インドメンバーに「ポイ捨てはするか」と訪ねたところ、外出時に出たゴミはポケットに入れて家に持ち帰ってから捨てる、とのことであった。これは私がかねてから彼らに質問したかったことである。なぜかという、インドを旅している間、多くのインド人たちが路上に、川に、線路に、ゴミを投げ捨てているところを目撃していたからである。彼らのようにすこし豊かな水準の家庭の人のポイ捨てに対する考えを聞いてみたかったのだ。しかしやはり友達の中にはまだそういう行為をする人もいたということも言っていた。彼らもインドの街並みのゴミの散乱具合をよしとは思っていなかった。

●総論

このゴミに対する人々の行動というのは日本もインドも変わらない。多くの人が面倒を回避しようとしてポイ捨てをするのなら、そのごみ捨てが面倒だという考えを徐々に変えていかなければいけない。

そのためにはゴミ処理制度を充実させることが必要であるという考えにいきついた。しかしその中にはゴミの処理に関するさらなる壁があり、大変困難な道のりであると伺える。ごみ処理現場ではたらく人材というのもまたその一つである。日本では企業と行政と二つのルートがあるが、インドでは低カーストの人がゴミを集めて処理場まで運んでいる。

制度を充実させたら、全員が自分たちで身の回りのゴミを処理するようになったら、その人たちの仕事がなくなっちゃうよ。とインドの学生が一言言っていた。



インド側プレゼンテーション

●TECHNOLOGY

日本側参加者	三上 貴司 住野 恭輔
インド側参加者	<u>Palijat CHakranabish</u> <u>Praveen Kumer</u>

●テーマ：ロボティクス

●概要：ロボットの多くは人を真似た機械であると言えるが、ロボットの定義は、実は世界標準となるものは存在しない。しかし、いくつかの本質的な特性はあると言える。それは「センシング」「ムーブメント」「エネルギー」「インテリジェンス」の4つである。

ロボットをデザインし、製造し、プログラミングし、テストするには、物理学、機械工学、電子工学、コンピューティングをすべて動員する必要がある。時には、生物学、医学、化学も必要とすることもある。

ロボットの活躍範囲は、地上、水中、微小重力環境、工場、農場、通信、サービス、モバイル、コンテスト、娯楽など多岐にわたるが、最も広く普及しているのは工業用ロボットである。

今後の、更なるロボットの発展が期待される。

●総論

「鉄腕アトム」に代表される近年の人型ロボットだけでなく、「人を真似る機構」としてのロボティクス、ロボティクスにより造られる「人を真似た機械」としてのロボットの歴史は非常に古いものだということがわかった。古代ギリシャの神話では火の神とされる鍛冶屋のヘーパイストスはロボットのタロスを作ったという。また、ロボティクスの起源は古代エジプトにあるとも言われているらしく、司祭が蒸気で駆動する仕組みを利用し寺のドアの開閉を行っていたという。日本で最古のロボットは「からくり人形」と言われているようだが、からくり人形はまた中国に起源をもつと考えられているようだ。ロボットの歴史はそのまま文明の発展の地理と歴史に重なるのだろう。

2000年には、ホンダがヒューマノイドロボット「ASIMO」を発表。ソニーは第三世代ロボットペットを2003年に市場に出した。今日では、手をつないで人についていくことのできるロボットまで登場している。今後ロボットはどう発

展していくのだろうか。技術者を目指すインドメンバーに、未来のイメージを聞いてみた。それは「街をロボットが歩いている」という、私たち日本人の描く未来と重なった。テクノロジーは文化的、空間的差異を超えてこれまで広がってきたし、これからも広がっていくのだろう。



●TECHNOLOGY

日本側参加者	住野 恭輔 三上 貴司
インド側参加者	<u>Palijat CHakranabish</u> Praveen Kumer

●テーマ： Interesting discoveries and inventions from India

●概要：

紀元前から現在までにインドの著名な科学者により発見された概念、発明に関するプレゼンテーションである。現代に影響を与えているものも数多くあり、その歴史について議論した。

①シンピュータ

シンピュータとはインドを始めとする開発途上国向けに NPO シンピュータ・トラストにより作られた PC 端末である。Simputer という言葉には「シンプルで低価格な、色々な言葉の人のためのコンピュータ」という想いが込められている。文書読み上げソフトを搭載し、Linux オペレーティングシステム上で動く。ハードは今日、日本でも普及しているスマートフォンに似ており、タッチスクリーンをスタイラスで操作する。単純な手書き文字認識ソフト Tapatap がついている。2004年に一般大衆向けに革命的デバイスとして発売を開始したが、売り上げは芳しくない。

現在、近年インド政府は安価な PC 端末の普及に力を入れているが、今年、イギリスの DataWind 社とインド工科大学の共同で低価格タブレット型端末が発売された。一般向けには約 3500 円で、学生は約 2700 円で学生に対しては政府が一部費用を負担する。このような端末の普及活動の背景にシンピュータは埋もれてしまったが今日のハードウェアに大きな影響を与えた端末の 1 つである。

②冶金

インド冶金の歴史は紀元前 2000 年前に始まり、6 世紀まで工業開発や化学成分の良さから化学工業の分野ではヨーロッパを遥かに先行しており、煅焼、蒸留、昇華、蒸気加熱、不揮発性化、熱を伴わぬ発光、麻酔薬や催眠剤の調合、金属塩・化合物・合金の調製などの技術を熟達していた。現在では、インドのエンジニアリングと言えばソフトウェア産業やハードウェア産業ばかりが目立つようになったが、冶金もインドを代表する伝統的なエンジニアリング技術の 1

つである。

●総論

インドではいわゆるソフトウェア、ハードウェア産業だけではなく、様々な IT 技術が根付いていることがわかった。インドにおいて工学が発展してきた理由として工学の基礎である「零の発見」や「位取り記数法の確立」がなされ、インド人の多くは数学やコンピュータ・サイエンスに非常に高い才能を有していたことがある。そのためインドでは伝統的に知的、精神的な活動を尊び、頭脳労働であるソフト産業に優秀な人材が集まりやすい環境にあった。また古代インドの膨大な聖典をシステムティックに分類する過程で発達したサンスクリット哲学において、「知識工学」とも言うべき高度に論理的な思考方法が培われてきた。さらにインドはヒンドゥー教の歴史や、仏教の勃興といった宗教の発展もあり、この高度で抽象的な思考を必要とする数学、哲学や宗教に対する素養が、同じ素養を必要とする IT にも生かされたと言える。

●BUSSINESS

日本側参加者	田中 龍之介 池田 直輝
インド側参加者	<u>Shrijeet Tripathy</u> Prahallad Saravana Kumar Vivek Narayan

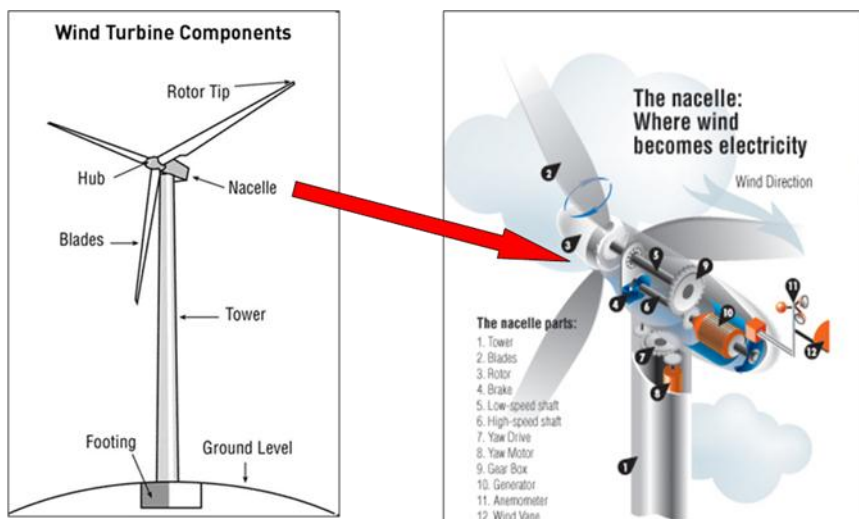
●テーマ：インドにおける再生可能エネルギーについて

●概要：東日本大震災以降、特に政治的にも経済的にも環境的にも注目度があがっている再生可能エネルギーについての発表である。このテーマは日本だけでなく、インドでも注目を集めているようである。

そもそも再生可能エネルギーとはそもそも、枯渇することがなく、温室効果ガスなどを出すことがなく、化石燃料に対して代替可能であり、自然から得られるエネルギーを利用している点が特長である。再生可能エネルギーとしては風力、太陽光、バイオマス、潮力、地熱、波力、バイオ燃料などがあげられる。今回の発表では特に風力と太陽光についてその設備の仕組みや現状について説明がされた。

★風力発電

風力発電は地球表面の寒暖の違いや地形などによって生み出される風が発電機の羽を回し、タービンがエネルギーを得ることで発電を行う発電方式である。右の図が風力発電システムの構造であり、聴

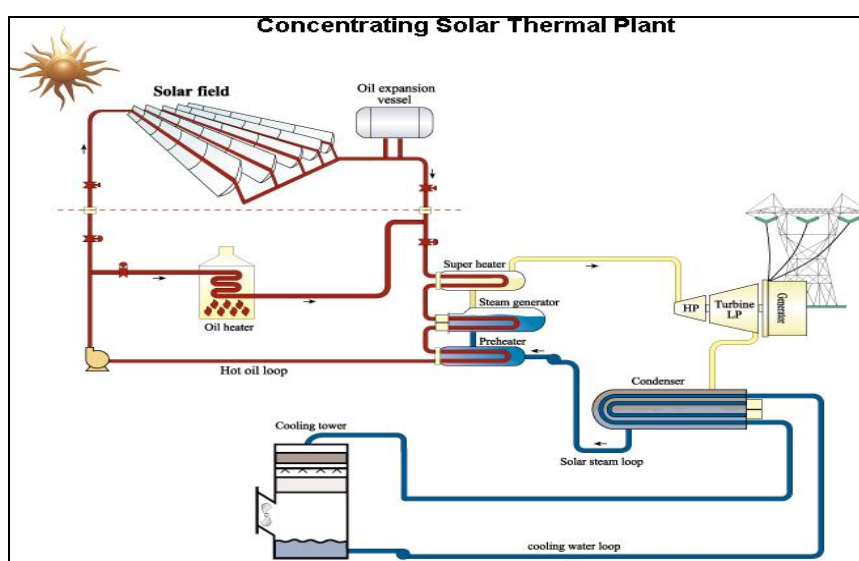


く側の我々は風力発電についてはその構造まではよく知らなかったもので部品の一つ一つについて説明を聞いたことはとても勉強になった。風力発電は世界でもインドでもここ10年で最も高い伸びを示しており、インドは世界4番目の風力発電国であり、その背景として環境意識の高まりや持続可能な開発の実現、

既存エネルギーへの需要増などが挙げられた。

★太陽光発電

まず、日本側にとって驚きであったのは太陽を利用する発電には2種類あることであった。我々にも一般的な太陽光パネルを置き、電子の移動を利用する方式は **Solar Photovoltaic Plants(SPP)** と呼ばれ、日本語では太陽光発電という一方で集光板の鏡の上にオイルを塗り、熱くなったオイルで水を沸かしてその蒸気でタービンをまわして発電する、**Concentrating Solar Thermal Plant(CSP)** という太陽熱発電もある。後者はコストもかからず、土地の広い地方部では一般的である。日本側からは近年の都市の地価の値上がりが多い土地を必要とする CSP に対してどのような影響を与えるかといった質問が出た。



●総論

技術的な説明が多かったため、図を見ながらじっくりと理解をしていくスタイルを採用した。日本側からは原子力の話が出てインドとしても有望なエネルギー源であり、インド政府も拡大方針を示しているとの説明があったがテロの標的として原子力発電所になるのではとの疑問に対しては大変難しい質問として考えがまとまらなかった。日本でもインドで再生可能エネルギーの利用を増やしていく必要性については双方とも同意し、日本はもっと地熱を活かすべきとの意見も出された。

●TECHNOLOGY

日本側参加者	田中 龍之介 池田 直輝
インド側参加者	<u>Prahal Saravana Kumar</u> Vivek Naraian Shrijeet Tripathy

●テーマ：エネルギー危機と再生可能エネルギー

●概要：インドは世界の 3.4%のエネルギーを現在消費し、毎年 3.6%の割合で伸びを見せている。しかし、インドではエネルギー需要に対して供給が約 13%足りていない現状がある。これこそがインドにおけるエネルギー危機である。その原因としては地方電力会社の貧弱な財務体質や原子力発電所、火力発電所の低い稼働率、監督機関の統治能力不足、設備投資の遅さ、電気の送電能力の不十分などが挙げられる。日本側からは東京電力の問題とからめて意見が出された。そこで ENERGY SECURITY、STABILITY IN THE MARKET、SUSTAINABLE POWER SUPPLY の 3 つの観点に注目することによってこの問題を解決しようと思う。

★ENERGY SECURITY

インドは主なエネルギーを輸入した石炭に頼っており、エネルギー安全保障上問題な面がある。

★STABILITY IN THE MARKET

化石燃料は枯渇する可能性があり、その価格の上昇によるインフレはインド経済に対しても悪影響を与えている。

★SUSTAINABLE POWER SUPPLY

発電所の数は電気需要に対して不十分であり、火力発電は経済的でなく、原子力発電所を求めるひとつの理由になっている。

→このような点を考慮したうえで各発電方式を見ていく。

▲火力発電

石炭は採掘、加工が必要で水資源も必要。温室効果ガスを排出。

▲原子力発電

プルトニウムが発電所の周辺環境に対して悪影響を与える。核爆発の危険性や核兵器に転用可能。半減期の長さや大量の汚染水を生み出す。

▲再生可能エネルギーを利用した発電

コストが化石燃料に比べて高い。そのため、民間企業は政府の補助政策なしには参入しづらい。現在の技術では需要を満たせるほどの持続可能性がない。→上記を考慮しても再生可能エネルギーへのシフトは必要である。なぜなら、化石燃料は環境に悪影響を与えており、石油は一部の国に供給がかたより、化石燃料の値段は高騰していて、外国の石油燃料に頼ることはエネルギーを自分の思い通りにできず、エネルギーにおける独立を犯すからである。

●総論

うちのグループは上記の内容を踏まえ、結論として信頼でき、未来永劫使うことの出来る再生可能エネルギーの使用を広げるとともに現在の発電所の省エネルギー技術を高めることが良い未来、良い“いま”をつくることになると結論づけました。日本側からは福島での事故を受け、核燃料の処理費用などを含めると化石燃料とのコスト差が縮まることや液化天然ガスの利用などが述べられ、全員で福島での事故を受けての感想などを話し合った。



●CULTURE

日本側参加者	畑岡 弥生 須藤 かおり
インド側参加者	<u>Koyel Pal</u> Suhasini Ganguly Pooja Das

●テーマ：インドの教育制度

●概要：主に、インドにおける小学校から大学までの教育制度と、家庭教育やディスタンススクールについて。

日本における幼稚園、保育園の時期には、インドの園児たちは主にランゲージスキルや知覚スキルを発達させるための授業やアクティビティを行う。

小学校では、現に 80%以上のインド人が政府のサポートのもと通うことが出来ているという。

中学校では、5 から 10 のクラスに分かれ、授業を行う。一授業は四十分であり、一日 6 時間半学校で勉強をする。一授業が四十分というのは良いアイデアだなと思ったのは、この時期の学生の集中力を考えれば四十分というのはとても良い時間配分だと感じた。また、全体の授業時間については日本の中学校とあまり変わらない気がする。また、中学校のすべてのクラスを終了した後にテストを受け、高校での自分の勉強する方向を決定するという。日本で言う高校受験である。

高校では、多くの学生は主に人文学、商業、科学、その他職業に関係してくる科目を勉強するという。

大学でも主に人気のある科目は変わらず、人文学、商業、科学などである。職業体験やインターンシップなどに参加する学生や、大学のアクティビティも多い。たとえば日本で、もしすごく勉強意欲のある頭のいい学生が大学に入りたいのに、お金がない場合はどうするの？と聞いてきた。日本には奨学金制度があるけれど、それに受からなかった場合は自分でアルバイトや仕事をしてお金を稼いでから入学するしか方法はないと答えた。インドメンバー達は日本のその現状に少し戸惑いがあるようだった。インドでは、そのような学生は政府からの援助のもとで大学に入ることが出来るという。

面白いと思ったのが、インドにおけるホームスクール制度である。インドでは、本人が望んだ場合や何か理由がある場合、家で教育を受ける事を合法とし

ている。しかし、ホームスクールで教育を受けた学生がどのようにまたメインストリームである学校に通えるか、という問題が発生しているらしい。

インド学生の特徴としてとても感じたのが、彼らは彼らの就職の為に大学で何を深く学ぶか、という事が前提なのであろう。インドで人文、科学、商業が主に人気の学部であると話したが、もっとも就職に使えるような知識を得られるため、彼らはこの学部を選ぶのである。逆に、日本で言う「文学部」などの科目は就職に繋がらないため人気がない、という事であった。

●総論

インドでの大学生になるまでの教育制度は、さほど日本と変わらないという事が分かった。また、メンバーたちは直接口に出してはいなかったのだが、インドではカスタム問題、格差問題と絡まって大学に行けない人や教育を受けることが出来ない人も実際には多くいるということを感じた。

将来に確実に繋がり、いわゆる「お金持ち」になれる様な学部が人気があると聞いて、日本学生との違いを感じた。日本ではある程度の大学に行けばどこかの会社には入れるだろうという感覚がやはりまだ学生の中にあると思う為、この様な違いがあるのではないかと思った。



●CULTURE

日本側参加者	須藤 かおり 畑岡 弥生
インド側参加者	Koyel Pal Suhasini Ganguly <u>Pooja Das</u>

●テーマ：インドにおける祭典の種類とその意味。

●概要：インドには様々な祭典が存在し、その数は実に膨大である。小さなものも含めたら、毎日インドのどこかしらでお祭りが催されていることになる。なぜそれだけの数の祭典が存在するのかというと、インドには本当に膨大な数の民族や宗教があり、それぞれが自分達のお祝いごとを大切にしてお祭りをやるからである。今回のプレゼンでは、その膨大な祭典の数々の中でも、特に重要視されている4つの祭典についてまとめられた。

ディワリ：ヒンドゥー教徒にとって新年とも言える大祭。毎年10月下旬から11月上旬ごろのカールティック月（ヒンドゥーの暦の7番目の月）の新月の夜に行われる。別名を「光の祭り」とも呼ばれ、インドの収穫の時期に当たり、富と幸運の女神ラクシュミや、富と繁栄の神ガネーシャに対し祈りの儀式（プージャ）が行われる。ちょうど日本の新年のように、ディワリの前には各家々が大掃除を行い、多くの場合は壁も新たに塗り替えて、心機一転新しい年の訪れを祝う。

ホーリー：春の訪れを祝う祭りで、盛大に祝われるヒンドゥーのお祭りのひとつで、とくに北インドでは熱狂的で、場所によっては旅行者の身に危険が及ぶ可能性もあるため外出が禁止されるほど。ヒンドゥー暦のチャイトラ月（3月下旬～4月上旬ごろ）の初日（パールグナー月の最終日に当たる満月の次の日）、早朝から色水を掛け合う無礼講でホーリーは始まる。ホーリーは、水掛け祭りと無礼講の要素を併せ持った祭りなので、人々はとにかく暴れまわって一年間の憂さを晴らす。カーストやコミュニティーでがんじがらめになったインド社会も、このときばかりは好き勝手に振舞ってとがめられないため、そうした意味で、この祭りにはインド社会のガス抜きという役割がある。

ダシエラ：ディワリの20日前に行われるダシエラは、ヒンドゥー暦のアーシュヴィナ月（9月下旬～10月上旬ごろ）の10日目に行われる祭りで、別名ヴァジャヤ・ダシャミー（勝利の第10日）といわれる祭り。この日は、善が悪に勝利した日であると考えられおり、ディワリやホーリーに並ぶ重要なヒンドゥーの

祭りにあたる。

イード：イスラムのヒジュラ暦の断食月ラマダン明けを祝う盛大な祭りがイード・アル・フィトル。この祭りはイードル・フィトルや単にイードと呼ばれたりもする。

●総論

インドのこの祭典の多さは、インドにいかにも多くの民族や宗教が存在しているのかの表れである。また、数がただ単にあるだけでなく、それぞれの民族や宗教が、自分達のものにとっても大切にしていることの表れでもある。インド側メンバーは、主要な祭典についてならば、その祭典の意味合いやいつどこで地域で催されるのかを大方説明できた。しかし、日本の祭典についての話題になった時、日本側メンバーは日本で祝われる祭典の意味合いやその重要性を、自信を持って説明することができなかった。こういった側面から、自国への関心や理解の度合いに差があることがはっきりと表れた。どの祭典にもそれぞれ大切な意味合いがあるから存在するわけなので、自分達の国のことを理解するうえでも、祭典への理解というのは重要なことなのだという意見に集約された。

● SOCIETY

日本側参加者	内野 隆子
インド側参加者	Pushpita Dhar Nibedita Sen Aritra Chowdhury <u>Nivetha Mohanraj</u>

● インド側テーマ：近代農業

●概要：世界での農業は気候帯により栽培作物に違いはあるものの、栽培方法に関しては同じような働き方をすることが多い。だからこそ、他地域が原産である作物がその地を離れても世界中で楽しまれている。プレゼンでは、伝統的農業方法と近代的農業方法を比べ、発表してくれた最先端な近代農業の有効さを話し合った。

学生が調べてきた発表がとても完成度の高いものであったので、他のメンバーはまずそれに感動した。農業というのは私たち人間が生きていくために必要不可欠な営みであるので、みんな興味津々に発表を聞き入った。

伝統的な農業では人間の手や動物の力で行われていて、機械は使われていなかった。そして農地は日本でもインドでも、森林を燃やして切り開く「焼き畑」によって確保されていた。

しかし近年、人口増加に伴う土地の欠乏や水分確保の難しさ、科学物質の土壌滞留などによりこのような伝統的な方法は、通用しなくなってきてしまったようだ。機械の農具を使った大きな面積を必要とする大規模農業とはまた違う、土地も水も節約する農業が今求められているのだという現状を知らされた。

ハイドロホニクスとエアロホニクスという単語を聞いたことがあるだろうか。私はこの発表で初めて耳にした。この2つの水を使わない室内栽培方法について詳しく教えてくれた。室内栽培では棚のようにして培地を上に積み上げることができるので、土地の節約になるし、水は循環させるので水の節約にもなる、近代農業の問題を一挙に解決してくれるような設備なのである。この栽培方法は多くの作物に有効である上、土地や水を多く使わないので持続的であるといえる。

しかしハイドロホニクスなどのこのような栽培方法というのはまだまだあまり普及しておらず、先進国で今徐々に取り入れられてきているほどである。おそらく、私たちが農業の現場に土地不足といったような問題が深刻化してきていて、

食料供給が困難であるということを認識していないから、普及も進まないのではないか。このような栽培方法が求められている土地不足・水不足の地域はもっとあるのに、普及にかかるコストがは妨げになっている。技術革新が進み、準備が整ったのならば、今度はそれを広めていく管理技術が必要であるという結論に達した。

●総論

日本でも、店内で栽培した野菜をそのまま商品として消費者に提供しているスーパーやサンドイッチ店がある。店内で栽培しているということはもちろんとりたて、新鮮であるため、食の安全性が注目されている世の中でとても有効なことではないかと思えた。

より多くの国や地域でこのことが承認され普及されるにはさらなる宣伝と開発が必要かもしれない。今回このプレゼンをきっかけに近代農業の今を知ることのできた私たちこそ、土地や水を節約できる室内栽培について広げていく媒体になれたらいいという話をした。

インドもまた、水不足が深刻な国のひとつであるらしい。しかも今回取り上げたような農業用水だけでなく、清潔な飲料水の確保も困難であるとのことであった。

ただ、人口が増加しているインドにとってもこの近代農業というのは、とても有用な資源保全の方法のひとつであるといえるだろう。



フィールドワーク報告

9月12日 IHI 本社(豊洲、東京)

9月13日 北区防災センター



15:25	博物館 i-muse 見学
16:25	質問会

目的：

世界的に展開している企業を訪問し話を伺うことで、自分たちの視野を広げることが目的にした。また同時に、重工業の実態を学び、化石燃料が枯渇に向かっている世の中での、今後のエネルギー供給問題について考えることを重視した。

化石燃料に代わるエネルギー源として注目された原子力は、3月11に日の東北大震災以降、危険視されてきている。震災で被害をうけた福島第2原発の事故もふまえて、日本もインドも生きるには欠かせないエネルギーの問題について、考えるきっかけをつくる機会になった。

概要：

まず、IHI 本社の一階に開設されている博物館 i-muse を見学した。IHI の方が英語で案内をしてくださったので、とても有意義な時間になったと思う。Explore the Engineering Edge “エンジニアリングの最先端を探求する” というスローガン通り、創業当初から造船、陸上機器、航空・宇宙機器など様々なものづくりの最先端をいく、IHI の歴史と展示物の説明をしていただいた。

見学の後は、会議室にて IHI の CSR 担当者の方とフランスからのインターン生とともに質問会を行った。インドの学生からの質問にすべて丁寧に答えてい

ただで、とても貴重な体験となった。

感想：

企業訪問先として IHI のような日本を代表する企業を訪問させていただき、大変興味があった CSR などについて議論ができたのは非常に良かった。インド側の学生にとっても日本の企業の担当者と話せる機会は貴重ということで多くの質問も出ていてとても良かったと思う。

14:45	ビデオ視聴
15:00	消火器体験
15:30	煙体験
15:45	地震体験
16:15	施設見学

目的：

2011年3月11日に、日本で起きた東北大震災を受けて、私たちの災害に対する意識は高くなってきている。しかし、意識はあるものの、実際に活用できる自己防衛の術をしっかりと身につけられていないことも事実である。災害時の対応を学ぶことを目的にセンター内の見学と災害の体験設備を使ったレクチャーを行った。

概要



●消火器体験

普段でも学校などでよく目にする消火器だが、実際に使ったことはないのも、とても貴重な体験になった。5人ずつくらいにメンバーを分けて体験を行なった。消火器を持ち、「火事だ！」という言葉で合図にレバーを引き、消火活動に当たった。慣れないながらも普段触ることのない消火器に興奮しながら楽しんで

使い方を学べたようだった。訓練には本物の火を使っていてスリルがあった。

消火器の使い方はとてもシンプルで、黄色の安全栓を抜いたらあとは目標に向かって噴射するだけだった。インドにも同様な消火器はあるらしい。インドでも日本でも炭酸ガス方式の消火器が普及しているようだ。

●煙体験

火災が起きた際、炎はもちろんのことだが煙というのも大きな脅威である。不完全燃焼のときに発生する有毒ガスの一酸化炭素は吸い込めば命の危険にかかわるし、化学製品が燃えたときに発生する有毒ガスや炭素粒子(すす)、また熱気も体内に取り込んでしまうと呼吸困難を起し、体の自由が利かなくなる危険性がある。つまり、煙を吸って、体の自由が利かなくなってしまうと、避難ができなくなってしまうのでそれを避ける必要がある。

体験では、煙を吸い込まないためにタオルやハンカチで口を覆い、腰を低くして避難をするということをレクチャーしていただいた。煙で視界は悪く、壁に手をつけてそれに沿って出口を目指した。

数名に分かれて部屋に入り、教えられたことを守って安全に避難する方法を実践することができた。



●地震体験

メンバーを2つに分けて行った。震度3では壁を抑えて立っていることができたが、震度4、震度5に上がってくると立っているのは危険なので座って体験した。震度6強では壁に頭を打つと危ないので全員頭から座布団を被っての体験となった。

揺れを感じたら、まず逃げるのではなく、自分の身の安全を確保することが最優先である。しかし、地震に備えるといってもその地震がどのぐらいの猛威をふるうのかというのは実際に地震に遭ってみないとわからない。今回、揺れを体験したことで本当に自分が地震に遭ったときの心構えを得ることができただろう。

感想：

防災センターではパネルでの英語表記はあったものの、説明は全部日本語で行われた。そのため、私たち日本側メンバーは一人一人が通訳となって防災センターの方が説明して下さった内容を英語でインド側メンバーに伝えた。内容を正しく伝えるのはすこし大変だったが、言葉やジェスチャーでやり取りしたのはおもしろかった。その時改めて、JISCは本当に学生主体で動いているのだなど、実感した。

災害はあって欲しくないことであるが、もし、起きてしまった時に今回の経験が役に立てばいいなと思う。そのときまで、しっかりと忘れずにいることが大切だ。

文化交流プログラム報告

<開会式>

●インド側



プシュピタによるインド舞踊



プラハルによるコルカタの音楽

●日本側



日本側による書道パフォーマンス



<閉会式>

●日本側



ソーラン節のパフォーマンス

●インド側



チェンナイ、コルカタ双方からインドの歌謡や日本語の歌の披露

●日本、インド両メンバーによる「We are the world」の合唱



修了証





写真集



初対面 @成田空港 (9/10)

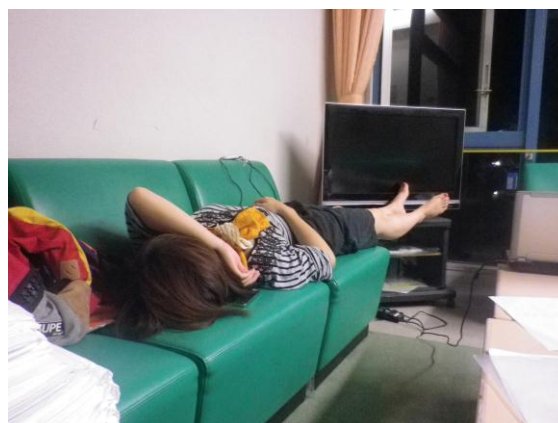


日本の最先端ファッション！
…らしい

→畑岡氏ソファで爆睡。
お疲れ様です。



インドメンバーと初対面。
Nice to meet you !



レセプションパーティ@リトル・インディア (9/11)



なんとお店にはカラオケが！
しかもヒンディー語です

フィールドワーク IHI 本社 (9/12)



小田急線遅延のため、この日はタクシーで新宿駅まで。

会社の前で記念撮影。
内部は残念ながら撮影禁止でした…

フィールドワーク 北区防災センター (9/13)



←しっかり話を聞いています…

→出口をふさいで悪ふざけ。
※絶対に真似しないでください

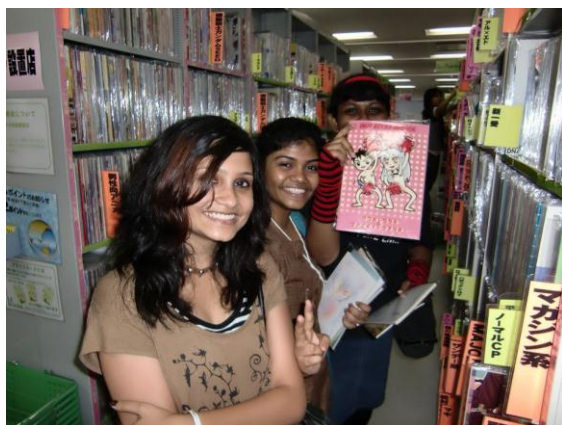


←家のようにくつろいでいますが
展示物です。



都内観光 (9/14)

池袋の同人誌のお店ではしゃぐ
インド女子



UFO キャッチャーをレクチャー！
獲得できたのでしょうか…。

インド大使館 (9/14)



大使館内には美術品もたくさんあ
ります。



おいしいインド料理をいただき
て、おなかも満足。

食事会の後、みんなで記念撮影



横浜 (9/15)



横浜インドセンターにて。インドと横浜は意外と関係が深かった！



インドにゆかりのある方々とたくさんお話ができました。



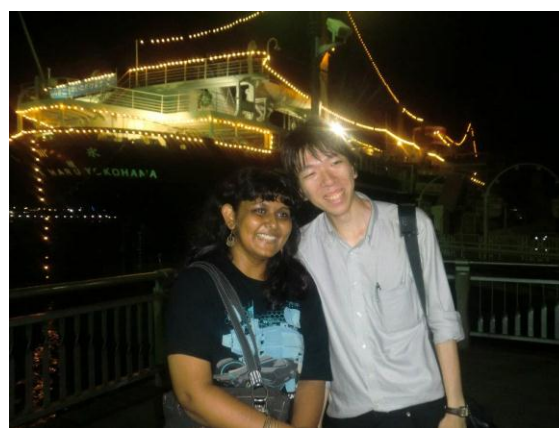
JISC メンバーからも質問が。



時間外のため、船には乗れませんでした。残念！



横浜の夜景に日本側もテンションが上がりはしゃぐ！



落ち着いた熟年カップルのよう。

都内観光 (9/16)



渋谷にて。見慣れた町のはずけど、一応記念撮影。



築地にて。
海鮮丼は口に合ったかな…？

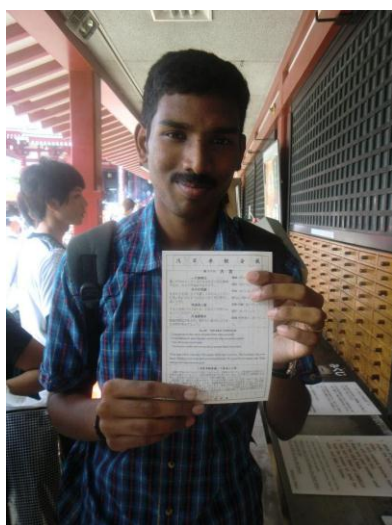
浅草観光 (9/17)



仲見世通りを散策。



その帽子、よく似合ってます



←2人とも大吉ゲット！↑

オープンセミナー (9/18)



CULTURE チーム発表の様子。



長浜先生と一緒に日本メンバーで記念撮影！



閉会式 (9/19)



アリトラ君のストールを借りてファッションショー。



長浜先生からのプレゼント。象のように強くなります！



インドメンバーと一緒に歌う住野君。

お別れ (9/20.21)



お別れが次の日のプラハル君は今日も笑顔です。



お別れは寂しいですね。



東日本大震災の募金箱を見つけたプージャーちゃん。



「帰らないで！」と一発。



台風だったけど大きな遅延や欠航もなくて本当によかった！



みんなを送り終わって一安心！

< 第四部 >

個人語録

せっかくの大学生活なのだから何か形に残るものをつくりたい、せっかく英文科にいるのだから英語を使えたら尚いいな、そういう思いと共に、巡り巡って出会ったのが、この日本インド学生会議であった。ここでの経験が、こんなにも素晴らしいものになろうとは、入った当初は思いもよらなかった。

今年は東日本大震災という本当に心の痛む出来事があった。今期の本会議は日本で開催されることになっていたため、当初、その開催すら危ぶまれていたのだが、志のあるメンバーが一緒だったため、このように開催に踏み切ることができた。そんなこんなで始めから困難に見舞われた今期のJISCだったが、夏に開催された本会議は10日間と短いものであったものの、それは実に濃いものとなった。インドの学生は実に元気でおおらかで好奇心旺盛で自由で、予想をはるかに上回るアグレッシブさがあり、日本の生活、社会、文化、日本にまつわるものにはほぼ全てとっていいほどのものに関心を寄せていた。そんな彼らと過ごしていて気付かされたことが2つある。ずっと日本で暮らしてきた私にとってはとても刺激になることであったことは間違いない。それは、真のコミュニケーション力についてと、母国への知識のなさについてである。

一つ目の真のコミュニケーション力についてだが、これは単に英会話能力を指しているわけではない。確かに、英語力というのはとても大切であるし、私にはそれが圧倒的に足りていないのだということは明白だった。インド側メンバーの一人が体調を崩しかけたとき、その症状を説明されても瞬時に理解することはできなかつたし、ディスカッションに至っては、プレゼンに関して意見があってもそれをうまく相手に伝えられないもどかしさといったらなんとも言い難い悔しさがあつた。でも確かに感じられたのは、たとえ言葉が完全に通じなくとも、アイコンタクト、ボディランゲージ等でコミュニケーション手段はいくらでも増やすことはできるし、言葉では足りない部分をそうしたもので補うことは大いに可能であつた。そして、最も効果的なコミュニケーション手段だと感じたのが「笑顔」であつた。10日間という短い期間ではあつたけれども、それでさえも、世界共通語は「笑顔」だと本気でそう思えた。笑顔一つでこんなにも場を和ますことができ、心を通わすことができるなんて、本当に「笑顔」は最強な言葉だと再認識した。異文化の人と接していく上で言葉が重要な役割を果たしことは間違いない。でも話せたからといってそれでコミュニケーションを取れているのかといたら、それはそれで間違いであると思う。心を通わすことができこそコミュニケーションが取れていると初めて言えるのではないだろうか。そうした点から、真のコミュニケーションとは何なのか

を改めて考えさせられた。

では次に二つ目の母国への知識のなさについて述べることにしよう。これは、ディスカッションの中で明らかになったことである。最も顕著に表れたのは、とあるインドメンバーがインドの祭典についてプレゼンを行ってくれた時のことである。インドメンバーは発表者以外であったとしても、インドの祭典や文化について聞かれた時、大方説明可能であったし、しかもその説明一つ一つに熱意を込めて話してくれた。しかし私達日本側はというと、質問されても、簡潔な説明はできないし、できたとしても曖昧であったりと、自信をもって回答することがなかった。そうした一連の出来事から、いかに自分が日本人として自国の文化について知らないか、関心を寄せていないのかについて痛感した。インドメンバーは自国についてこんなにも知っているのに、どうして私達は自分達の国のことをこんなにも知らないのかと、恥ずかしさ半分悔しさ半分といった気持ちでいっぱいになった。私達が今後ますますグローバル化していくであろう世界の中で生きていくには、外国のことをもっとよく知ることは大切なことである。でもそれよりまず先にすべきことは、母国の日本を知ること、自分のバックボーンをしっかりと捉える事なのではないだろうか。それが、世界と繋がっていくための第一歩のように思われる。

以上のように、たった10日間の本会議ではあったが、そこから気付かされた、インド人の温かみ・心の広さ、異文化世界に住む人とのコミュニケーションの取り方、日本人としての自分達の在り方といったものは、本当に大きな収穫だったと思う。準備段階でも、本会議本番でも、ハプニングやら苦労したことは本当に多かったが、その代わりに得られたものはそれ以上のものであったことは間違いない。そして、こうして無事に本会議を終えられたこと、第15期日本インド学生会議として活動できたことは、この15期という仲間があつてからこそだと思う。みんなありがとう。また、このような貴重な体験を提供していただき、今期の開催にあたって大きなご協力をいただいた長浜先生、JISC OBOGの皆さま、関係者の皆さまには心の底から感謝の意を述べさせていただきたいと思います。誠にありがとうございました。



大学 1 年の春休み、私は何かに誘われ一人、インドの地に降り立った。誘われる、そんな表現は大げさといわれるかもしれない。ただ、どうしても当時の私にはインドだった、インドでなければならなかった、理由なんてなく、ただひたすら、インドが私を求めている、そんな気がしていた。そこに甘い蜜があるのか、それとも劇薬があるのか、そんなことは考える余地もなかった。何があっても構わない、インドにとにかく行きたい。思い立ったのが大学の春休みが始まった当日、そして 4 日後、私はインドの地に立っていた。

そこでの体験は割愛するが、言葉で表せないくらい本当に素敵な人たち、文化に触れ、それでいて私の想像以上の格差をみた。それから私の大学生活が一変した。副専攻として、開発経済学を履修しそれに関するゼミにも所属、フェアトレードを行うサークルにも所属し、英語も未だに話せるとは言い難いが勉強をしている。そしてもっともっと世界を知りたいと強く思うようになり、次の夏休みにタイ、ネパール、またインドに、そしてスリランカ、春休みはトルコ、シリア、レバノン、ヨルダンに一人旅をした。

そんな生活を続けていて、延長線上に自然に JISC という存在があった。もっとと純粹にインドを知りたくてたまらなかった。そして、日本開催ということで日本のよさをたくさん教えてあげたいと思った。

JISC の本会議が始まった 9 月 11 日からの 10 日間、時間はあっという間に過ぎて行った。

何を伝えられたかはわからないが、私が彼らと過ごした十日間は私にとっての宝物である。10 日間寝食を共にし、さまざまところに出かけ話し、笑った。何よりも私が一番、確信として得られたもの、それは彼らが真剣に、これでもかというくらい真剣に生きており、自分という個を他人に惑わされずに生きているということだ。私たちは（日本の大学生を一般化するわけではないが）、やりたいことをある程度、狭まれた範囲の中で探しがちだ。そして、夢についてあまり多くを語りたがらない。ただ、インドメンバーの多くは自分のやりたいことについて真剣に語る。それも本当に、妥協をせずにひた向きに夢に取り組んでいた。なかには、夢が定まっていないメンバーもいた。しかし、彼も本気でいまと対峙し、悩んでいた。

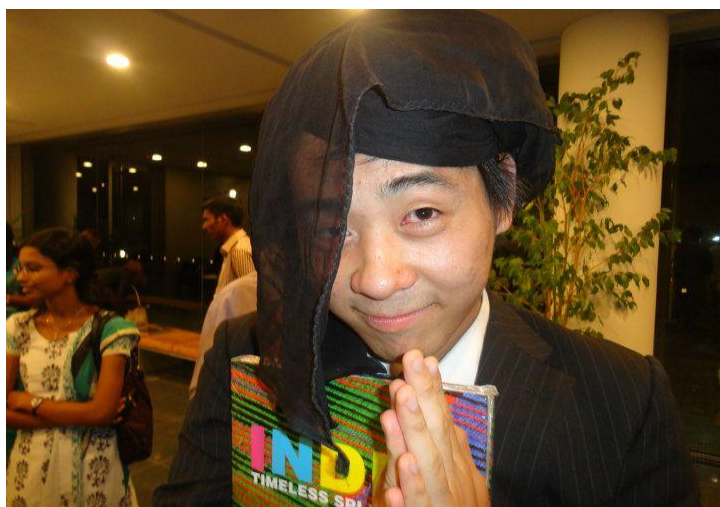
私たちは、周りに左右されがちだ。「みんなが～だから、私も～する」。この言葉と共に、多くの日本人は生きてしまっているといっても過言ではない。ただ、インドではそうではなく、「私は私、あなたはあなた」なのだ。だから、あ

る日、インドメンバーに「何故、電車で大きな声で話したり、電話をかけてはいけないのか」と質問を投げかけられたが、これは彼らにとっては自然に湧き起こる疑問なのだろう。パブリックの空間は、みんなのものであるが、それはつまり「私の空間」なのだ。そこで、私が何をやっても構わないと彼らは主張をする。たしかに、私がインドに行き鉄道に乗った時、多くのインド人は思い思いの行動をしていた、鉄道のなかで思いっきり音楽をかける人、大声で電話をする人、話す人、多くの人がいた。

どちらが正解、不正解かそれはわからない。ただ、私たちはわかりもよく考えもせず、周りに迷惑をかけるかもしれないから、またみんなが電話をしないから、みんながやらないことはやらないでおこう、そんな気持ちで物事を判断していると感じた。だからといって、これから私が日本の電車の中で電話をかけはしないが、これからの将来について「みんなが」で流される、それだけはやめよう、と強く思った。きちんと考えて、判断しよう、浅はかな気持ちだけで選択するのはやめようと思った。

また、10日間を通して私はインドが本当に好きだと実感できた。本当にこれは嬉しい。これからも、インドと関わっていきたいと思うだけでなく、もっと多くの人々にインドを近く感じて欲しいと思う。ただ、そのために、何をすべきなのか、何をしたいのか、もう少しきちんと考えたい。時間ならまだまだ、たくさんある。いつかまた、みんなに会いに行きたい。ただ、日本とインド、遠く離れていると思っても、飛行機で10時間未満、案外遠くないんじゃないか、そんなことを感じる昨今である。

長浜先生をはじめとするお世話になりました多くの関係者の皆様、こんなにも素敵な機会を私たちのために与えてくださり誠にありがとうございます。15期のメンバーのみんな本当にありがとう、そしてこれからもよろしくおねがいします。



1月にこの学生会議に入ることを決意してから、はや十カ月が経とうとしている。あの時の私と今の私は、どう変わっただろうか。いや、絶対に私の中の何かが変わった。今まで、自分ひとりで何か新しい場所に入って挑戦するという事を恐れていた私は、自分を変えたいという思いでこの学生会議に入った。一人で何か「挑戦」したのはこの会議がはじめてである。これまでの人生の中で、インドに興味はあったものの本格的に関わるのは初めてだった。また、学生という立場で運営を行うという事も初めての事だったので、初めは本当に右往左往の日々だった。だんだんと仕事を覚えていくにつれ、仕事量も増え、毎日溜まったメールの返信や事務の作業に追われるばかりで、もう！と投げ出したい事が増えるようになったのも事実だ。前が見えなくなるたびに、九月に行われる本会議の事を考えたり、インド人の事を考えたりして、自分を奮い立たせていた。

そして来たる九月十日、ついにインドメンバーが日本にやってきた。私の彼らに対する最初の印象は、「ああ、普通だ！」である。私が想像していた「インド像」よりもはるかに、一般化していて、また、私達日本人と変わらなかったからである。それが普通なのかもしれないが、変な先見的イメージを持ってしまっていた私は少し驚いてしまった。しかし十日間の間に、彼らと会話を交わしたり少し真剣な問題について話していると、文化に基づく考え方の違いなどがはっきりと浮かび上がってきたりもした。例えば、彼らの様な若い人たちは、日本の学生の様にパートタイムジョブはしないという。自分の生活費や諸々の費用は親に出してもらっているという。「なぜパートタイムジョブをしないの？」と聞くと、「インドには教育を受けられなく知識を持たない人がたくさんいて、その人たちはまともに会社には入れない。パートタイムジョブのような仕事はそのような人たちが働く場所だから、私達が彼らの仕事をとってはいけないんだ。」という。パートタイムジョブひとつをとってみても、社会的背景と繋がっているのだ。また一方で、「インドでは女性は結婚したら、飲酒も喫煙も絶対にしてはならない。もししてしまったら、周りからひどい目で見られたり噂をされたりするんだよ。」という。私は「あなたはそれについてどう思うの？」と聞くと、「僕は別に、奥さんが飲酒をしても良いと思うんだ、むしろ一緒に飲みたいね。」といった。こうして、きっとインドでの昔からの慣習であったものも、彼らの世代になってくると共に薄れてきているんだなあ、と思った。分科会では、両国のメディア産業について議論した。私が東日本大震災について話していた時、インドメンバーの眼差しがとても真剣だったのは印象深かった。

また、インドでもし大震災が起こったとしても、テレビで放送されるのは二ヶ月後だよ、と笑いながら言っているのには驚いた。インドではテレビ産業が今ものすごい勢いで発達しているけれど、テレビとしての役割がまだまだ果たされていないのではないかというのが印象に残った。

私を感じたのは、インドと日本、文化も慣習も全く異なっていた国だけれど、確実に近づいてきている、つまりフラットになってきていると。世界が段々と近づいている事を改めて実感させられた。そして、インド人は暖かい。議論好きで、話しだしたら止まらないというところはインド人らしいなと思ったが、本当に素直な心の持ち主で、なにより本当に暖かかった。彼らが最後に言ってくれた、「もう私達は家族だから。」という言葉が今でも胸に残っている。

本当に怒涛の十カ月だったが、何よりも濃いものだった。この経験は、私にたくさんの事を気付かせてくれた。辛かった運営という点でも、楽しかった本会議の経験という点でも、この先の私の未来に必ず役立つと確信している。そして私はより勉強をして知識をつけ、もう一度彼らと熱い議論を交わしたい。そして、インドの人に、もっと日本について知ってもらえたら最高！と思っっているし、そうした活動をしていきたいと思う。



いま、この文章を書き、普通に学校に行くなかでこの日本インド学生会議での10日間を思い出すとなんて楽しかった、ユートピアのような日々だったのかとついつい現実逃避をしてしまう。当時の写真を見たり、インド側メンバーとウェブ上で交流するたびにあの10日間がいかに関心の中心にあったのかと思いを馳せる。始まる前はインドを政治、経済、安全保障などの関係でしか見てなかった自分がインドの“今”を知りたい、インドに触れたいとインド信者になってしまった。そんな濃い10日間であった。

この学生会議に入ったきっかけはただ、学生団体の運営側に入りたいという思いと国際社会で重要度の増している国と関わりたいとの思いからマッチしたこの学生会議に興味本位で入ってみたことであった。なので国際交流とかは自分からも遠い存在でした。日本で本会議開催に向けて準備するなかでもなかなか国際交流というものが何なのかをつかめずにいました。しかし、実際に本会議が始まってみると国際交流の魅力というものにとりつかれる日々でした。自分とまったく違った価値観や興味をもつインド側メンバーとの触れ合いは驚きの連続でありました。そこで発見したことが多くありました。一つ目はインド側メンバーの教養の深さや興味の広さでした。自分は分科会で自動車産業について発表をしたがインド側メンバーは去年のインドでの人気車種トップ10を知っている上、自然科学、スポーツ、文化、経済など幅広い知識を有していて底知れぬインドパワーを感じました。日本だとどうしても自分の専門や興味のあるところだけを知ろうとしがち傾向があり、このような面も最終的には国力の違いにつながっていくと感じた。二つ目はインド側メンバーの前向きな姿勢であった。日本に来て出来るだけ多くを学び、吸収しようとする姿勢、全てに真剣に取り組み、日本側メンバーを常に前に向かせようとする姿勢を感じた。「カーズなんかは今の時代は関係ない」という発言は今でも心に残っている。夢を失いがちな日本の大学生とは大きく異なっていました。三つ目は自分自身の英語での意思疎通能力の低さでした。正直、日本の英語教育につきり、外国人と長い間英語で話し、意思疎通をとるという英語本来の役割からは離れた英語教育を受けていたため、英語で外国人と意思疎通をとるのは今回がほぼ初めてということであり、最初のうちはなかなか文法などに気を使いすぎて考えを伝えるのに苦労してしまった。次第に慣れてきたが今思うとまだまだ意思疎通能力は低かったように思える。この経験を通して「使える英語」としての能力を自分としても上げる必要性を痛感し、自分に投資しなくてはと思った。正直、英語に関してここまで思ったことはなかったので本当に自分の現状を知れて良かった。この10日間は自分を成長させてくれたし、成長へのきっかけや刺激をたくさんくれた。

10日間インドメンバーと触れ合い、いまとてもインドメンバーに再会した

いし、彼らの住むインドに行きたい思いが強い。たぶん、学生のうちに行ってしまうであろう。人と人との草の根の交流が重要だとよく言うがその国の人と触れ合い、友人になってこそ、その国を理解することなのだと感じた。日本に引きこもり、日本人とだけ触れ合うのではもったいない。もっと色んな国の人と触れ合おう。それが喜びなのだと感じた。インドに出会えた、その喜び、幸せをすごく感じている。

最後になったが、15期の日本メンバーには本当に感謝をしてもしきれない。つたない私を本当に支え、楽しませてくれて。インドメンバーにも「ありがとう」と伝えたい。みんなの笑顔や優しさが私を成長させてくれたから。そして何よりも長浜先生をはじめ、この学生会議開催に協力してくださった全ての皆様に対してこの場を借りて深く御礼を申し上げさせていただきます。本当にありがとうございました。

この10日間の情熱の火が燃え続けますように



本会議が終わって3週間ほどが経とうとしています。あの10日間と終わってからの約21日間、どっちが濃い日々を過ごしたかと聞かれたら…間違いなく前者を選びます。

本会議に参加する前の私は、自分のやりたいことの原因を聞かれても「よくわからない。なんとなく。やりたいからやる。」と答えていました。でも、他人に自分のしたいことを理解してもらうのってとっても大事なことで、自分の世界を広げる大きなチャンスになります。「わからないこと」をわかるようにする。そしてそれを他人に伝えられるようにする。そうすれば、自分のことなのになんとかしかわかっていなかった大事な目的が、はっきりするようになります。

私は大学に入ってから長期休暇の際は海外旅行に行くのが好きで、インドも2回訪れたことがあります。1回目は今年の2月で、そのときの2週間の旅で私はインドに魅了されました。国民ひとりひとりがインドの良さをよく理解しているようで、独自の文化を尊重するインドの人々はとても魅力的でした。というか、少し羨ましかったのかもしれませんが。私は、彼らのように自国を愛していないし、自国で生きる毎日を楽しんでいないのではないかと不安になりました。洋服を着ている男性も多く見られましたが、女性はサリーやパンジャビドレスなどの民族衣装を身にまとっている人がほとんどでしたし、額や眉間に印をつけている人もいっぱいいました。彼らの生活の場にはいつも“インド”があるのだということを感じさせました。私は特に信仰している宗教はありませんが、宗教と共にある生活を送る人々の環境をととても神秘的に思いました。

日本はというと、日本の文化を尊重しているようなものは今ではどんどん少なくなってきたりし、衣服や食事や建築、ほとんどのものが日本独自の文化から遠ざかりつつあるなあ、と感じます。私自身も着物の着方や日本式の作法などよく知らないことばかりです。でも、私は日本で日本人として暮らしてきました。今まで、ずっと、そんな環境を当たり前と思って生きてきました。しかし、インドは違いました。彼らは自分たちの国の暮らしを、文化を、大切にしっかりと力強く生きていたのです。

そんな感じで私はインドに興味を持つようになりました。サークルなどに所属していなかった私が学生団体に入りたいと思ったのが今年の5月。大好きなインドをもっと知るためにもインドに関連した団体に入ろうと、探した結果、この日本インド学生会議に出会いました。

2回目にインドに行ったのは学生会議に参加してからの今年の8月です。その時9月に日本に来てくれる予定のインドメンバー2人に会ったことも、記憶に新しいです。旅行先でできた友達にもう一度会うことができるというのは初めてだったので成田空港で再会したときはとっても嬉しかったです！インドにいた時は英語が全然話せなくて彼女たちに迷惑をかけてしまったことと、その時「英語、がんばろう！」と奮起していた自分を思い出しました。結局、本会議中も

彼らの優しさに大変甘えてしまうことになったのですが…。

本会議では、客観的に見た事がなかった日本を、客観的に見たことしかない彼らと共に旅していたので、とても新鮮さを感じました。インドにいた間の自分が見る日本の印象と、インド人を連れて東京の騒がしい街を歩く自分が見る日本の印象は、少し違ったように思います。なぜだか自分が外にいるときよりも、日本を客観的に見る事ができたかもしれません。

普段私は都心へ出かけていくことがほとんど無いので、探り探りでの案内をしていました。そして街を歩いている時、私は都会のビル群の景色に何か異様さを感じました。そこで疑問が浮かびました。日本が大切にしているものってなんだろう、と。

私の頭の中にまた「わからないこと」が増えました。冒頭で述べたように、これをわかるようにしなくてはならなくなりました。解決は大変ですが、人生この繰り返しなのかもしれません。自分の中の「わからない」が増えれば増えるほど、自分が動き出す理由も増えます。動くということは経験すること。経験することは私の人生で一番大切にしたいことでもあります。様々な経験の中で多くの人と触れ合い、話し合い、自分なりの答えを見つける。そしてその過程でまた「わからないこと」が発生する。私はそんな疑問たっぷりの人生を送れば、これほど贅沢なことはないな、と思います。

日本インド学生会議は、私の疑問を増やしたり減らしたり、いろんな躍動をくれました。これでまた私の人生は少し豊かになったかもしれません。それに、かけがえのない仲間とひとつの目標に向かっていくという、普段の生活ではなかなか経験できないことを経験できたし、なにより大切な仲間がたくさんできました。本会議までの歩みのなかで、みんなには本当にたくさん迷惑をかけたと思います。本会議が終わった今、15期の報告会まで、そしてその先も、今まで以上に日本インド学生会議に真摯に向き合っていきたいと思います。

最後に、私にたくさんの考えるきっかけをくれたインドに、そして本会議に携わったすべての方々に、この場を借りて感謝申し上げます。



「Life is happy.」「Keep smile.」「I like change, I want to change.」

インドメンバーの何気ない一言が、私には大きな衝撃だった。

原宿を歩いている時に、彼女は言った。「あなたは静かですね。日本人は、あまり感情を表に出さない。インド人は、嬉しい時には街の中でも踊って、悲しい時には涙を流して、文句がある時にはワーッと喋る」私は尋ねた。「日本人がもっとオープンになるには、どうしたら良いと思う？」「笑顔でいることかな」ある時、彼女は微笑んでいた。「なぜ笑っているの？」「人生は幸せなものだから」

本会議最後の夜に、長い時間を一緒に過ごしたチェンナイメンバーに尋ねた。「日本人はどうだった？」「親切で、優しく、良い人ばかりだ」「じゃあさ、日本人の良くない所はどこだと思った？」「うーん、コミュニケーション、かな。空港での待ち合わせがうまくいかなかった時、『ごめんなさい』とお互いに謝った。インドだったらそれでおしまい。けど、日本のメンバーは、帰りの間ずっと謝っていた。あと、あまり自分のことを話さない」動物園で将来について話したことがあった。彼は大学を出たら、父の仕事は継がずに、海外で仕事をしたいと言っていた。「おれは変化が好きなんだ。変わりたいんだ」その時、私は自分の将来について語ることはなかった。

その後、最後の夜の夕食で、私はチェンナイの他のメンバーに尋ねた。「将来の夢はなに？」「世界で活躍するビジネスマンになることかな。君の夢は？」「そうだな…人々が幸せになるのを支えること、かな」「どうやって？」「まだわからない。けど、今はエネルギー関連企業か、金融機関に勤めることを考えている。」「企業に勤めることで、夢をかなえるの？」「うん。そう思ってる。」

本会議の10日間は、あまりにあっという間に過ぎていった。正直、本会議が始まってからも準備に追われていて、終了直後はインドメンバーと過ごす時間を十分に取れなかったという悔しさがあった。けれど、今こうして報告書を書きながら思い返す10日間は、たくさんの出来事と会話で満たされていて、その一つ一つが自分の深い所を揺さぶる経験だったのだとわかる。

時間を守ってくれないことや、自分勝手とも思える行動に、いらいらした時もあった。ハプニングしかないじゃないか、と投げ出したくなる時もあった。けれど、最後まで意地を張ってがんばったのは、きっとそんな時間を楽しんでいたからなのだろう。日本とインドは **complementary**、即ち相補的だと言うが、違いを楽しんでいたのだと思う。

私が日本インド学生会議に参加したのは、本音で本気で語り合いたい、という想いからだった。つまりは、仲間が欲しかった。そしてそれは、見事に達成されたのだ。しかも、日本とインドにだ。日本以外の国＝外国に仲間がいる、という感覚を抱けたのは初めてだった。新聞やテレビに出る「インド」という

言葉が、ただの言葉でなくなった。メンバーの顔が浮かぶ。「インド」は、うまく表現できないが、「ふるさと」という響きに似た、人の生活する風景になった。

ここに、国際交流の意味があるのだろう。「外国」が存在することなんて誰でも知っている。けれど、そこで生活している人がいることを実感を持って感じることは難しい。しかし、「人」を実感することで初めて「インド」を言葉としてではなくリアルな風景として理解することができる。こうして世界が広がっていくことこそ「グローバル化」、国際化なのかもしれないな、と思った。

本会議と同じく学びとなったのが、本会議の準備だった。JISC15期の運営メンバーは人数が少なく、一人ひとりの仕事量が非常に多かった。そして、東日本大震災の影響で活動開始が遅れたことが忙しさに拍車をかけていた。15期で唯一の大学院生としてしっかり活動を支えなければという想いがあったが、研究との両立はしんどかった。もうやめたいと思うこともあった。けれど、今となっては挑戦してよかったと心から思う。挑戦したから、たくさんの出会いがあった。一歩踏み出すことの苦しさ大切さ、人と人のつながりの有り難さと大きさを知ることができた。

私が活動を続けることができ、皆で本会議を実施することができたのは、本当にたくさんの人の支えがあつてのことでした。感謝の心でいっぱいです。ありがとうございました。

そして15期のみんな、ありがとう。みんなと第15回日本インド学生会議を創り上げられた奇跡に感謝します。みんなと過ごした時間は一生の宝物。これからもっと豊かにしていけたらと思う。

最後の夜の夕食。そこで、私は微笑んでいたらしい。日本メンバーが私に言った。「なんで笑ってるの？」私は答えていた。「笑いたいからだよ。」



We are different than we feel, but similar than we think

住野恭輔

”想像していたよりも似ている”、それが本会議を通してインド人に抱いた印象である。インドと日本。同じアジアの経済大国でありながら全く異なる文化を持つ両国。6世紀初めの仏教の伝来に始まり、今日まで交流を続けてきたインドと日本だが、まだまだ人的交流は浅く、両国の国民による深い相互理解へは至っていない。”日本人にインド人はどんな人”かと聞けば”カレーを好む人たち”、”カースト制度の中で生きている可哀想な人たち”という言葉をよく耳にする。もちろん、現在でもそのような文化が根深く残っている地域もあるが、経済成長による近代化と共にインドのほとんどの地域は多様性をもちながらも大きく変容している。そして、そこに住むインドの人々もまた変化している。

私が今年度の会議前にインド人に抱いていた印象は”優秀”、”信心深い”、そして”踊り好き”であった。実際、インドの学生と接してみると非常に優秀であった。インドの中産階級出身の彼らは全員が流暢に英語を話し、同じ地域の友達通しでも英語で会話をしている。これだけ英語を話すことができるのにも関わらず、他にそれぞれ専攻を持っている。”英語がそれだけできるのに自分の専攻も高いレベルの知識を持っていてすごいね”と言うと、”私は本当はもっと多くのことを勉強したい。でも、インドでは一つしか専攻を持ってない。とても残念だ。”という答えが返ってきて思わず下を巻いた。この時に感じたのは教育の環境の違いである。近年、日本では子供を育てる際に塾や予備校への教育機関へ委託することが多いがインドの中産階級の人々は子供を自分たちの手で育てている。親が子供に勉強を教えることはもちろん、常に日常会話の中心は勉強について。インドの親はいつも子供により高い教育を与えることを考え、それにすべての時間を捧げる。子供のためなら昼夜問わず働くことも厭わない。そんな親の強い愛情から生まれる子供への教育が今日の優秀なインド人を創り上げていることを知り、インドの見え方が変わった。インドの経済発展に伴う、彼らのような優秀な中産階級の増加がインド全体に影響を与えている。

また、近代化しつつある昨今において宗教、神に対する信心深さは未だ人々

の心に根いている。現在、インドにはヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教を始め、数々の宗教が存在している。夕食の際に宗教、神についてコルカタ、チェンナイそれぞれの地域のメンバーと話す機会があった。あるコルカタメンバーは”私は〇〇教を信じているし、神の存在も信じている。”と言い、チェンナイのメンバーは”僕は宗教も神も信じない。自分の人生は努力次第でどうにでもなる”と言う。おそらく、20年前に宗教に対する信仰の強いインド人からこのような意見を聞くことはできなかつただろう。これもまた今日のインドの人々に起きているの変化の一部である。

そして、インド人にとって欠かせないのが”ダンス”である。インド人ほど踊り好きの国民はいないだろう。伝統的なクラシックからモダンダンスまで、テレビでは踊りのコンテスト番組が花盛りだ。彼らは結婚式、お祭りはもちろん、世界でも有名なボリウッド映画の中でも必ず踊る。近年は伝統的な古典舞踊よりも西洋顔負けのモダンステップを見せることが多くなったがインド人のダンスへの情熱は覚めることを知らない。実際、今会議中でも開会式、閉会式、その他にも私自身、個人的にサルサを踊らされることもあった。それくらいインド人にとって踊りは欠かせないものであり、この点に関しては向こう100年変わることはなさそうだ。”楽しいことが好き”、これは日本人もインド人も同じなのだと感じた。

今回の経験を通して、日本人もインド人もそんなに変わらないことを知った。一人、一人、個性が違うだけで私たちも彼らも同じ人間なのだと思う。この経験は私の人生に大きく影響するだろう。今後もインドと日本の草の根レベルでの交流を続けていきたいと強く心に思う。

インド側 (Kolkata) 学生からのメッセージ

★Any account that is written in memory of the conference that is just over must be an account that is incomplete and in some way, imperfect. And to compress within a report the memories of eleven days is an effort that will always fall short of the lived experience. Much will be written and said about the places that we visited, the things we saw, the food we ate and what we bought. And while I never seem to pass a day without the memories of Japan, far more important to me will be the people we met; the people who went out of their way to ensure that whatever we needed was instantly provided for and who became our second family over such a short span of time.

For any such student conference to be a success, it is the person to person interaction that ultimately counts. Being from a country that is so very different from Japan, we were thrown into a culture and a way of living that taught us how to accept and adapt ourselves to a different lifestyle and it is my assured belief that at the end of our stay we had all grown and matured as individuals, as well as a team that respected and admired other cultures for their differences from our own.

My only regret has been leaving behind the wonderful people I had met but there is some consolation in the hope that perhaps sometime in the near future we will all be reunited again and relive the memories of our time spent together. (Pushpita Dhar)

★I have never been to foreign country in the past and that too alone (without my parents), and in fact this was the first time in my life I rode a plane. Each and every moment of this trip starting from the point that we stepped on the plane to the point we bid goodbye to the Japanese team has been the undoubtedly the best moments of my life. I shall never forget these times and more importantly I shall never forget the people who were involved in this incredible journey. I have had friends in the past and I hopefully I shall have friends in the future, but the connections and the bonds that we had made with the Japanese team in this trip will surely last the test of time. I must say without any fear that they are my best friends and I hope that they also like us. The hospitality, care, meticulous planning and execution that they have exhibited is unparalleled. Even though we were in a foreign land for ten days, never were we made to feel that we were not at home. They had catered to all our needs individually and as a group. I feel privileged to be associated with JISC and hopefully I shall be able to attend JISC or IJSC in future. I specially want to thank the Indian team who has stayed together the entire time. Last but not the least , thank you to all the Japanese members for having us in your country. Hope to see everyone of you again in future!!!!!(Aritra

Chowdhury)

★My name is Srijeet Tripathy and I was a member of the 15th Japan - India Student Conference which was held in Tokyo from the 10th of September to the 20th of September 2011.

I would like to start by saying that this has been the most enjoyable and knowledgeable experience for me and the rest of the students who have participated. Before visiting Japan, my impression was one of a country famous for kimono, sumo, sado, origami, earthquakes, electronic products, and with people having extreme politeness and a heightened sense of formality. And me being awkward and clumsy, I was slightly apprehensive of the visit since I was unsure of my conduct. However, to my utter relief, things between us went so smoothly that it felt as if we had been friends for a long time and I realised that my worries were absolutely unnecessary. Within these ten days I learned a lot about Japan and its culture. I learned about the various customs, food habits, the work culture, the Kansai dialect, Izakaya, Otohime, and a lot of other things. But what moved me the most was the politeness and the extreme respect Japanese people have for guests and each other. All in all it was an insightful and a heartfelt experience.

The table discussions that we had were really fruitful. We discussed about a lot of topics ranging from science to social problems, sports etc. I enjoyed these discussions and also discerned that Japanese students are knowledgeable, prescient and dedicated. The main objective of the "JISC" is to congregate students of both the countries to have intellectual discussions and to compare between the two cultures and perspectives. But to me it is not about finding the differences but the similarities, of what we have in common and most importantly it is about creating everlasting bonds between people from different cultures and backgrounds yet people nonetheless. On my way back to India I realized that I was leaving a big piece of my heart behind and the bond we all now share is an unbreakable one. Even though we are physically separated we are connected mentally and I am sure that we will meet again. (Shrijeet Tripathy)

★The JISC 2011 had been an extremely important platform for the exchange of ideas and cultures between India and Japan. With great anticipation, I was looking forward to my first Tokyo trip. I was very much moved to receive the warm welcome by the Japanese team after we landed in Narita airport. The following week witnessed a whirlwind of activities. The conference started with the Opening Ceremony, followed by Table Discussions, visit to IHI Co, an earthquake disaster management facility, a dinner

party at the Indian Embassy, sightseeing's, Open seminar and Closing Ceremony. I feel like 10 days are not enough to experience the beautiful and exotic Japanese culture. Although I have physically left Japan, a part of me has stayed there. I am sure the friendship which formed among members between both the countries will be everlasting. I would like to wind up by saying the 15TH JISC 2011 in Tokyo, was a great success and each and every member deserves a round of applause.(Koyel Pal)

★Visiting Japan had been my dearest dream for the better part of five years, now, and I had spent those five years imagining just what Japan might be like. Now that I have actually been there, I can, looking back, say with absolute certainty that it exceeded every single one of my expectations. It is difficult to describe just how incredible the ten days I spent in this wonderful country were - we went shopping for manga in Ikebukuro, electronics in Akihabara, clothes in Harajuku, and filled several bags with our purchases; we walked across the Shibuya crossing, visited the IHI corporation and the Kitaku-Bosai centre, bought souvenirs in Asakusa and indulged in riotous sessions of purikura; ate okonomiyaki, ramen, onigiri and tempura. Ten days were too short a time to spend in a city like Tokyo. Ten months would scarcely have been enough, and now that I have achieved my dream of going there, I dream anew of going back.

Now that I am back in India, I find myself filled with nothing but respect and admiration for the Japanese nation and the Japanese people. They are unfailingly polite, ever-courteous, punctual to a fault. They welcomed us into their homes and their hearts, and though we were several miles away from India, we had never felt more at home. The sheer amount of hard work and dedication they put into this conference was staggering, and for that, and the wonderful time they gave us, I thank them from the bottom of my heart.

Though this was my first time in Japan, it was my third time participating in the Indo-Japan Student Conference. And the lessons I learnt the last two times held true for this, the third - these lessons were numerous, but perhaps most important was the realization that ultimately, this conference does not teach us about difference. Yes, we discuss the differences in our cultures, learn the differences in our languages, compare and contrast our social practices and examine where they diverge. But at the end of the day, what we come away with is not the knowledge that we are different - it is the realization that we are the same. That, no matter what we look like, what language we speak, what kind of food we eat or where we come from - at the end of the day, we laugh and cry the same, can share the same jokes, and enjoy the same experiences. And that knowledge, I think, is the most precious thing this Conference has to offer.(Nibedita

Sen)

★To start with this is my second trip to Japan and 1st participation in JISC, and to be precise JISC was more than I thought of. It is not a mere table conference and sharing of ppt, it is more about knowing each other and sharing of thought, belief and culture. Through this conference I have come to know Japan and Japanese culture as a whole. 10 days of sharing even the smallest details of one's life , laughing over small jokes, roaming about the wonderful streets of Tokyo, having food together, sight seeing ,sleeping, studying preparing discussing had finally lead to an immortal bond of a lifetime, that was simple not imaginable if I wouldn't have been a part of JISC. The team was so great,that I will never forget the love and the care they bestowed on me on such a small time span.To add on separately,I would like to give a small tribute to all of you guys.

Yayoi: You are the most sweetest person I saw.I simply love your hairstyle and the way you smile when you nod your head so fast.You are always caring and please be like this.

Takako: It has been a pleasure for me to be a part of your family and get a chance to meet them.You have a great family and also a beautiful sister.You are very sweet and beautiful person.You have a wonderful voice,do keep singing more in the karaoke.

Kaori:I will not forget the way you went and bought medicine for me when I was having some stomach problem.You are so beautiful and caring.Pleae always be as you are.

Kyosuke: You are a great and hardworking person and can speak English really well. Please continue speaking English and remain the way you are.

Naoki: I will always remember the way you found me when I got lost in an unknown station. You are really very funny and jovial.I like the way you dance so well.

Takashi: You are so sensible and a good person. I really liked your presentation. Be like the way you are.

Ryoonosuke: You are really a great singer.Thanks for taking us to karaoke that day,and singing so well.It was really a great fun.

Guys overall, thanks for the beautiful days all together.Hope to meet again in life.(Parijat Chaklanabish)

★When I first got on the plane to Japan, I had no idea what to expect. I felt antsy, excited and just a little bit scared. But what I saw when I reached, was something I could never have imagined, not even in my best dreams. Throwing all rumors of language disparity and communication issues away, those ten days that I spent in

Japan could have changed my perception of the world and at the end of the day, turned me into a different person.

From jumping around in Karaoke bars to running around in Harajuku, the trip left nothing to the imagination. I met new people, saw how they lived, saw how we weren't so different after all – no matter where we were in the world. I realized we listen to the same music, feel the same anticipation when it comes to meeting someone for the first time, want to make friends with each other – and that no matter where we are, we will always be good friends, and that those ten days in Tokyo are unforgettable. Whether it be pushing each other around in Purikura stalls or feeling concerned when stops smiling, I never felt alone once I reached. As clichéd as it sounds, I felt like I was at another home.

Maybe its true, that as long as you have people you can enjoy with, laugh with, smile with, cry with, even fight and know they'll forgive you because that's what friends do... as long as you have these things, any place can be home. And JISC, was that for me. So thank you everyone, I will never forget the new world you helped me to see.(Suhashini ganguly)

★15th JISC of 2011 was an excellent opportunity to wipe out the geographical distance & assimilate the two identifiable cultures. It was an occasion to exchange knowledge,information.I being a 1st year student of Political science of LADY BRABOURNE college, Kolkata it was an immense means of pleasure to me to fulfill my dream to be there. The 15th JISC opened my path in a wider way & in future too I will reap the benefits out of it.In the opening & closing ceremonies your performances were cheerished by me & I came to know the art of caligraphy from you all. Through the table discussions the exchange of views on different topics were really beneficial. It was a great opportunity to visit the INDIAN EMBASSY ,INDIAN CENTRE where I was introduced with a lot of eminent dignitaries & personalities.The home stay was really memorable & I had a nice time with OKAMOTO San.I also liked the places like TOKYO TOWER,

HARAJOKU,SHIBUYA,SHINJOKU,ASAKUSA ETC. Finally I will give lots of thanks to my Japanese friends like Yayoi, Kaori, Takako,Kyusuke,Naoki, Mikami, Ryunuske of whose utterless as well as heartwarming efforts made the programme successful & enjoyable. This programme may be summed up as a bondage between one of the most diversified sections of the world i.e. INDIA & an ever fighting disciplined nation i.e. JAPAN.This kind of programme is indispensable for creating better understanding among the two nations & I wish to be a part of it ever.(Pooja das)

インド側 (Chennai) 学生からのメッセージ

★My impressions on Japan:

First of all, it was a pleasure for me to be a part of the 15th Japan India student conference. I would say I had one of the finest learning experiences in my life. The ten day program was jam packed with activities, interactive sessions, and loads of enjoyment. Our activities included Industrial visit to IHI Corporation, an awareness session about earthquake in kitaku bosai-earthquake disaster prevention center which was a totally novel idea and shows how serious and concerned they are about people's safety. We also made a visit to the Indian embassy, invited by the Ambassador him-self, was a very prestigious feeling for all of us. The table discussion we had was a good platform for exchange of ideas and served as an opportunity to get to know my Japanese counterparts better. I had also stayed at my friend's home as part of the home stay program, my hosts were very affectionate and they made me feel at home, I experienced the Japanese way of living.

Overall, in the course of the ten day program, my impressions on Japan had doubled with respect for their people. I feel it is their never say die spirit, their sincerity and perseverance which has kept them in the top even after severe crisis they faced during the world war and loads of disaster they face every year that has led them to this degree of growth that has left the whole world in awe of them. I find the Japanese to be great visionaries and lot more creative and their contribution to the technology has made the world a better place to live. India and Japan are both in need of good ties, I hope, in future, our relationship strengthens and we use our abilities to serve each other beneficially.

Lastly at the end of my message, I want to show my sincere gratitude to my Japanese friends; the event was all possible only because of them. It was so well planned and coordinated. They took great care of the Indian members; from the very first day when they received with such fondness and warmth, and none of us felt insecure or alienated even for a moment. (Prahala Saravana Kumar)

★My trip to japan was totally different and expand long day in japan. Japanese friends likely to be helpful. this program usefull direct the course of life. more suggestion put forward on the seminar and debates. we cannot be overcome japanese people's habits. i happy in the japan, but now feel alone because missing the japanese friends. the result of the program some difference created on me finally journey comes to end .if i made any mistake in program please forgive...thank you.....(Vivek Naraiyan)

★Japan has left me with unforgettable memories in my life and this was once in a life time opportunity for me. I liked the Japanese culture, I found their food to be very different from Indian food. Though I was not flexible enough to eat their food, I found it lot more healthier. The home stay was a wonderful experience for me, I found the Japanese way of living very similar to the Indian way.(Praveen Kumar)

★I AM VERY HAPPY TO HAVE BEEN A MEMBER OF THE 15TH JAPAN-INDIA STUDENTS CONFERENCE. THIS WAS THE FIRST TIME I HAD EVER BEEN TO A FOREIGN COUNTRY BUT I FELT VERY MUCH AT HOME WITH ALL THE OTHER MEMBERS.

MY FIRST IMPRESSION WHEN WE FIRST LANDED IN NARITA AIRPORT WAS “WOW.... SUCH A LARGE AIRPORT...” WHEN I JUST THOUGHT THAT WE HAD GOT OUT OF THE AIRPORT I FOUND THAT WE WERE STILL IN THE AIRPORT!!!!!! THE STUDENTS WHO CAME TO RECEIVE US GAVE US A VERY WARM WELCOME AND MADE US FEEL LIKE WE WERE SOMEONE SPECIAL.

ONE THING I LIKE SO MUCH ABOUT THE JAPANESE LANGUAGE IS THE KANJI SCRIPT AND CALLIGRAPHY. I WAS THRILLED WHEN THE JAPANESE SIDE MEMBERS GAVE US A DEMONSTRATION ON CALLIGRAPHY AND ALSO WROTE OUR NAMES FOR US IN KATAKANA. WE WERE ABLE TO MEET A LOT OF PEOPLE WHO GAVE US GUIDANCE REGARDING OUR FUTURE CAREER.

THE TABLE DISCUSSIONS WERE VERY INFORMATIVE AND WE EXCHANGED A NUMBER OF IDEAS WITH OUR TEAM.

I WAS AMAZED WHEN WE VISITED THE IHI. THEIR MUSEUM I-MUSE WAS VERY INTERESTING. ALSO THE EARTHQUAKE MUSEUM WAS A UNIQUE EXPERIENCE.

I WOULD BE MISSING OUT AN IMPORTANT ELEMENT IF I FORGOT TO MENTION THE SHOPPING.... TOKYO IS THE DREAM CITY FOR ANY GIRL OR BOY WITH PLACES LIKE MANTHARAKE, IKEBUKURO, AKIHABARA, HARAJUKU, ETC. AND THE JAPANESE MEMBERS ALSO ACCOMPANIED AND GUIDED US AROUND THE CITY THROUGH OUT OUR STAY.

THE DINNER AT THE INDIAN EMBASSY WAS UNFORGETTABLE. INVITING US TO YOKOHAMA AND THE WALK AT THE BAY WAS A MEMORABLE EXPERIENCE.

THE BEST PART OF THE VISIT IS THE HOME STAY. I WAS AMAZED AT THE HOSPITALITY OF THE JAPANESE. INVITING A TOTAL STRANGER TO THEIR HOME AS A PART OF THEIR FAMILY IS A REALLY GREAT THING. I ENJOYED MY HOME STAY VERY MUCH.

THE CULTURAL PROGRAMS AT THE CLOSING CEREMONY WERE A REALLY NICE AND WE ALL ENJOYED IT.

TEN DAYS SEEMS TO BE VERY SHORT A TIME TO SPEND IN A WONDERFUL COUNTRY SUCH AS JAPAN.

THE ENTIRE 15TH JISC TEAM IS NOT JUST ANOTHER GROUP OF PEOPLE. WE ARE A FAMILY. I AM LOOKING FORWARD TO VISIT JAPAN AGAIN.(NIVETHA MOHANRAJ)

<第五部>

おわりに

謝辞

第15期日本インド学生会議の活動において、私達は、日本、そしてインドで非常に多くの方々にご支援・ご協力を賜り、様々な面で助けて頂きました。「学生会議」とは申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点が多々あります。そのような時、皆様からのご助言が、私たちをより実り多き方向へと導いてくださいます。

下記の方々をはじめとする、多くの方々にご尽力頂き、第15回本会議を無事開催できましたことをこの場を借りて、実行委員一同心より御礼申し上げます。また、今後とも実行委員一同より良い学生会議づくりに励む所存でございますので、一層のご指導をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

2011年11月

第15期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

助成

公益財団法人 双日国際交流財団



公益財団法人 双日国際交流財団

企業協賛

エア・インディア

株式会社 モナ



後援

外務省

在日インド大使館

経済産業省

公益財団法人 日印協会

独立行政法人 国際交流基金

JICA

株式会社インド・ビジネス・センター

個人協賛

吉野宏様

日印協会 有志

カジイ エイジ様

長谷川時夫様

櫻井秀武様

アツミ ヒロユキ様

三田村尚様

滝澤由加里様

ヒオ チヒロ様

鈴木祐輔様

鈴木美穂様

菱沼智子様

イトウ ヒロキ様

小川名穂子様

松岡環様

染谷葵様

サノ イチヤ様

渡邊美津代様

ウスダ マサユキ様

橋本楨矩様

大野馨様

ハヤシ マナミ様

三神尊志様

オクダ ユキエ様

トリモト シンジ様

川口匠美様

栗原千咲様

フジイ チエミ様

ワタモト ユイコ様

オザキ マリコ様

鈴木千歳様

規約

日本インド学生会議規約

前 文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。

日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章 総則

第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。また、省略名称として「JISC(ジスク)」を使用する。

各代実行委員会に対しては「第〇期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第〇期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「〇〇年東京(カルカッタ)大会」などの名称も使用する。(〇は英数字とする。)

第二条 活動

(一)本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催
2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催
3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成
4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催
5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動

(二)本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。

第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議 規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設

ける。

- 「日本インド学生会議 実行委員会規定」
- 「日本インド学生会議 OB・OG 会(仮称)会則」
- 「日本インド学生会議 会費規定」
- 「日本インド学生会議 創設趣意書」
- 「日本インド学生会議 基本理念」
- 「日本インド学生会議 各代実行委員会趣意書」
- 「日本インド学生会議 長期計画案」

第二章 構成員および組織

第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者(石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏)の3名である。

第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有す

る。

第十条 OB・OG 会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG 会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。

- 一、 役員の選出および罷免
- 二、 役員の退会
- 三、 予算および決算
- 四、 顧問の委託
- 五、 規約の改正
- 六、 その他必要と思われる事項

また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上（但し OB・OG の議決権が有効な事項に関しては、OB・OG 会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める）の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。

主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OG の議決権>
役員の選出および罷免	○	
役員の退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG 会に関する事項	○	○

第十二条 任期および会計年度

(一) 任期および会計年度

実行委員会は、その年の本会議より四か月以内に改組し、その後、約 1 年間を任期および会計年度とする。

(二) 業務の延長

前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はそ

の業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。

(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第三章 処分

第十四条 処分

長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

第四章 附則

第十五条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十六条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。

第一回改正 平成 11 年 1 月

第二回改正 平成 12 年 4 月

日本インド学生会議実行委員会規定

第一章 実行委員会

第一条 実行委員会

学生たる構成員は、例外を除き全ての実行委員としそれを総括して実行委員会とする。

第二条 実行委員の平等および義務

実行委員は、平等に本会議の意思決定に参加し発言する自由を保障される。また、実行委員は定められた金額の会費を納める義務を負う。

第三条 実行委員長および副実行委員長の選出

実行委員会は、本会議を代表する実行委員長を一名選出し、またこれを補佐する副実行委員長を三名まで選出することができる。

第二章 局

第四条 局の設置

実行委員会は、本会議の運営を円滑化すると共に義務の分散を図るため、下記に定める局を設置する。また実行委員会は、必要に応じて新たに局を設置し、本会議の運営および業務を円滑に、かつ滞ることのないようにしなければならない。

- 一、 国内渉外局
- 二、 国際渉外局
- 三、 学術局
- 四、 総務局
- 五、 企画局
- 六、 財務局
- 七、 広報局

第五条 局の運営

局の運営は各局で局令を発行し、それに準ずることとする。

第六条 局長および副局長の選出

実行委員会は、各局一名の局長を選出することを要する。また各局長は、これを補佐する副局長を二名まで選出することができる。

第七条 国内渉外局

国内渉外局は、本会議の日本国内の関係者および関係団体との連絡をその職務とし、活動報告等を随時報告するとともに、本会議活動を継続させるために必要な財源開拓等の涉外か通津を滞りなく行わなければならない。

第八条 国際渉外局

国際渉外局は、本会議のインド側関係者および関係団体との連絡をその職務とし、必要事項について随時連絡しなければならない。

第九条 学術局

学術局は、分科会トピックに関する勉強会およびその他の講演会等を計画することをその職務とし、学生が有意義な学習をする機会を提供しなければならない。

第十条 総務局

総務局は、本会議の通常活動を円滑化することをその職務とし、定例会の会場予約・必要書類および名簿、その他の財産の保管をしなければならない。

第十一条 企画局

企画局は、会議開催に関する諸々の企画・計算を創ることをその職務とし、本会議の目的および各実行委員の意志を反映した企画をしなければならない。

第十二条 財務局

財務局は、本会議の財政を管理することをその職務とし、全ての支出入を記録し、予算作成および決算報告をしなければならない。

第十三条 広報局

広報局は、本会議の活動についての広報および実行委員募集の広報をすることをその職務とし、全国の(過渡的な処置として、創立から数年間は首都圏のみ)大学・大学院・短期大学・専門大学に対して広報活動しなければならない。

第三章 附則

第十四条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、「日本インド学生会議規約」第十一条の用件を以って、承認される。

第十五条 執行期日

本規定は、公布の日からこれを執行する。

日本インド学生会議 OB・OG 会(仮称)会則

第一条 目的

日本インド学生会議 OB・OG 会は以下の三点を目的として活動する。

- 一、 物心両面において現役実行委員会の活動を支援する。
- 二、 本学生会議構成員相互及びインド側 OB・OG 会との持続的な親睦・交流の輪をつく

る。

三、 日本インド学生会議の精神を体現し、持続的かつ長期的な活動の実現と、社会還元への模索を続ける。

第二条 会員の資格及び権利

OB・OG 会会員の登録資格は実行委員経験者及びそれに相当する者とし、実行委員会退任時に、引退し会員となるか、退会しいずれの権限も有さないかを選択する。

OB・OG 会会員は、名簿に記載され、機関紙および報告会・総会・その他現役実行委員会および OB・OG 会事務局が重要と判断した会合の通知を受ける。

また、以下の議決権を有する。

- ・ 本会議の解散
- ・ 活動方針の変更
- ・ 会計報告の承認
- ・ 規約の改正
- ・ その他の重要事項
- ・ OB・OG に関する全ての事項

なお、本人の退会の意思がない限り、毎年度自動的に継続して会員登録されるものとする。

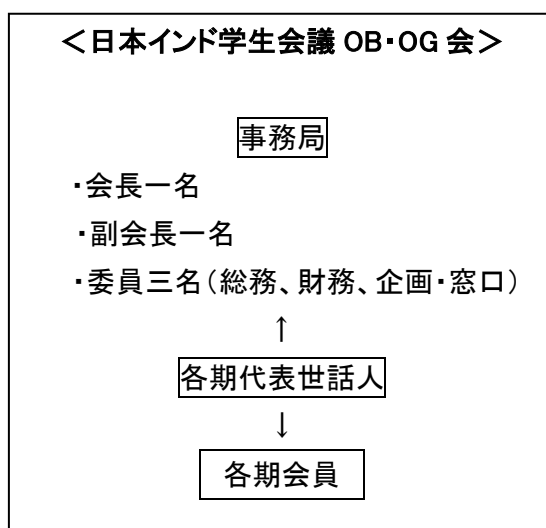
第三条 会員義務

OB・OG 会会員は、以下の事項を守らなければならない。

- ・ 毎年一定額の会費を納入する。またその際、納入期限を厳守する。一年以上滞納した場合は退会しなくてはならない。
- ・ 住所等連絡先に変更のあった場合は、速やかに各期代表世話人及び事務局に報告する。報告しない場合、会費が納入されても必要な通知が届かないことは、会が任を負うところではない。また、連絡がつかない場合、自動的に退会と見なされる場合がある。
- ・ 本学生会議の主旨および活動方針を尊重する。これに著しく背く行動・言動をとる、または運営に極めて支障になると認められる行動・言動をとる会員には、事務局が強制退会を含む適切な処分をすることができる。
- ・ 本学生会議の主旨に同意し、本団体の目的達成のために活動する。

第四条

OB・OG 会では、各期から一名の代表世話人を選出し、その中から会長・副会長を一名ずつ選出する。また、実質的な事務を行うものとして、委員を原則として三名引退一年目の期から選出する。これらを事務局とし、任意は原則的に、代表世話人は二年以上、会長及び副会長は二年以上、役員は一年とする。



第五条 事務局及び代表世話人の職務

(一) 会長、副会長

会長、副会長は、OB・OG 会の代表として、以下の事項が滞りなく進むよう指示を出し、会の運営に責任を負う

(二) 委員

事務局委員は、以下の担当事項を職務とする。

- ・総務担当役員：会員名簿・各期財産リスト管理
- ・財務担当役員：会費徴収と財務管理
- ・企画・窓口担当役員：OB・OG 会総会、その他行事の企画、現役実行委員会との連絡窓口

(三) 各期代表世話人

代表世話人は以下の事項をその役割とする。

- 一、 名簿管理の円滑化：同期会員の住所などの連絡を受け、事務局に連絡する。なお、各期の名簿は代表世話人が管理する。
- 二、 会費徴収の円滑化：事務局より同期会員の会費未納者の連絡を受け、当人に納入を促す。
- 三、 財産保管：各期の報告書・資料等、全財産を管理・保管し、要請があれば提出する。

(四) 事務局役員変更規定

会長・副会長・代表世話人・事務局員などが任期中にやむを得ない理由でその職を退任する場合、退任者本人が、後任の者を推薦し、総会での可決をもって変更の承認を得ることとする。

第六条 資金

OB・OG 会の活動は、全会員の会費の3割で行うものとする。残りの 7 割は現役実行委員会

の活動費に寄贈する。

第七条 活動及び会計年度

OB・OG 会の活動及び会計年度は、「日本インド学生会議」第十二条に定める、その年の現役実行委員会の任期に伴うものとする。

第八条 OB・OG 会総会

OB・OG 会では現役の年度末に総会を開催し以下の事項の議決・承認をとる。

- 一、 活動報告
- 二、 会計報告
- 三、 役員を選出
- 四、 その他、必要な議題

また OB・OG 会総会は事務局全員と全世話人の三分の一以上の出席及び委任状提出をもって成立し、出席者の過半数で議決を行うことができる。

第九条 付則

この会則はその発行をもって施行される。

第一回改正 平成12年4月

日本インド学生会議 会費規定

本会議では、会費を以下の通り規定する。

実行委員	1,000 円／月
OB・OG 会会員	3,000 円／年
その他の構成員	原則としてなし

編集後記

この報告書を作りながらメンバー一人一人が本会議のことを思い出したでしょう。そしてできたのがこの報告書です。7人7色の文章ができました。読むだけであの10日間は想像できる、そんな報告書になっていたら幸いです。

この報告書の作成、報告会の実施をもって今期の活動が終わると考えると達成感とともに寂しさも残ります。でも、今回の活動がメンバー一人一人の未来を明るく照らしていってくれると深く信じています。そんなみんなにネルーの言葉「勇敢であれ、すべては後からついてくる」を贈りたいと思います。勇敢に日本を引っ張っていてくれることを願って・・・

2011年11月12日

第15期日本インド学生会議 広報局長 田中龍之介

第15期日本インド学生会議報告書

2011年11月発行

編集

広報局長 田中 龍之介

広報局次長 内野隆子

発行 第15期日本インド学生会議実行委員会

代表 住野 恭輔

公式 HP <http://www.japan-india.jp/>

公式 Blog <http://ameblo.jisc>

E-Mail contact@japan-india.jp

公式 Twitter アカウント : JISC15